

映画の祭りは終わらない(上) ーアジアフォーカス・福岡映画祭の始まりから2005年まで― …………… 八尋 義語

書籍紹介

2022年度 学会活動

東アジア研究 第31号

目 次 CONTENTS

留守児童の農村社会に対する否定的な認識の形成過程に関する実践研究 一対話的問題提起学習を援用して一	芸] un
〈研究資料〉	
研究資料「映画の祭りは終わらない」の 本誌掲載までの運び ····· 金縄 初	美
映画の祭りは終わらない(上) 一アジアフォーカス・福岡映画祭の始まりから2005年まで― ・・・・・・・ 八尋 義 The festival of movies will not ends: From the Beginning of the Focus on Asia Fukuoka International Film Festival to 2005	
〈書籍紹介〉	
石井幸孝 『国鉄一「日本最大の企業」の栄光と崩壊』(中公新書) ······ 木幡 伸	二 57
森平雅彦・辻野裕紀・波潟剛・元兼正浩編 『日韓の交流と共生一多様性の過去・現在・未来一 (九州大学韓国研究センター叢書 5)』・・・・・・・・・・山田 良	介 59
緒方義広・古橋綾ほか (著) 『韓国学ハンマダン』	ナ 61
〈活動報告〉	
2022年度 学会活動	63
Year 2022 Activity Report	

留守児童の農村社会に対する否定的な認識の 形成過程に関する実践研究

一対話的問題提起学習を援用して一

A Practical Study on the Formation Process of Negative Perceptions of Rural Communities in a 'Left-behind Child' in China: Utilizing Problem-posing Learning

Abstract

In this paper, the author, a former left-behind child, conducted a dialogue with a current left-behind child (Wu) four times utilizing problem-posing learning, and qualitatively analyzed the data extracted from the content of their dialogue. The analysis revealed that Wu rated the living environment in which he was born and raised (rural areas, farmers, agricultural/physical labor) poorly, while he rated the living environment to which his parents migrated (cities, urban people, secondary and tertiary industries/IT industry) highly.

The growth process of Wu until he formed the above perceptions can be divided into three stages: (1) 0 to 7 years old (first left-behind child period), (2) 8 to 11 years old (migrant child period), and (3) 12 to 15 years old (second left-behind child period). In the period from 0 to 7 years of age, Wu was born in an economically backward and chauvinistic rural village, but he was raised without any inconvenience, being cared for by his family and others around him. From the time of his birth until the age of 15, at the time of the reported dialogue, he had hardly participated in agricultural production activities, and thus had no opportunity to learn about the farming village, farmers, and agriculture that surrounded him. From the age of 8 to 11 (migrant child period), Wu spent time as a migrant child at his parents' migrant workplace (Guangzhou). At first, he could not get used to the local dialect and school life, but gradually he was mesmerized by the convenience and economic development of the city. Later, Wu mastered the local language and developed good relationships with the people around him, which revealed a high sense of belonging to the city. At the age of 12 to 15 (second left-behind child period), Wu returned to his hometown rural village again, but the author could recognize that he showed resistance to his parents and other rural people and things, and that he viewed his current living situation negatively. Thus, although Wu was born and raised in a farming village, he was completely disconnected from the social context of farming villages, agriculture, and farmers. As a result, he did not identify as a member of a farming village, and he did not have a strong sense of regional belonging. This may have had a significant impact on his later personality development and sense of values.

要 旨

本稿では、対話的問題提起学習を援用して留守児童経験を持つ元留守児童の筆者が現留守児童(武)と4回の対話を行い、2人の対話内容から抽出したデータを質的に分析した。分析の結果、武が自分の生まれ育った生活環境(農村・農民・農業/体力労働)を低く評価している一方、両親の出稼ぎ先の生活環境(都市・都市の人・第二・三次産業/IT産業)を高く評価していることが分かった。

上記のような認識が形成されるまでの武の成長プロセスは、(1)0~7歳(留守児童時期)、(2)8~11歳(流動児童時期)、(3)12~15歳(留守児童時期)の3段階に分けられることが分かる。まず、0~7歳(留守児童時期)は、武が「男尊女卑」の観念が強く経済的にも遅れている農村で生まれたが、家族や周りの人に大切にされながら不自由なく育てられていた。生まれた時から対話時の15歳までほとんど農業の生産活動に参加しなかったため、自分を取り巻く農村・農民・農業を知る機会もなかった。次に、8~11歳(流動児童時期)は、武が流動児童として両親の出稼ぎ先(広州)で過ごした。最初は、現地の方言や学校生活に慣れなかったが、徐々に都市の利便性と経済的な発展ぶりに魅了された。その後、武は現地の方言を習得するとともに、周りの人と良好な関係が構築されたため、都市に対して高い帰属意識が窺われた。最後に、12~15歳(留守児童時期)は、武はまた故郷の農村に戻ったが、両親をはじめ農村の人やものに対して抵抗感を示し、自分の生活現状を否定的に捉えていることが読み取れた。このように、武は農村に生まれ育ったにもかかわらず、農村・農民・農業という社会文脈と完全に切り離された結果、自分が農村の一員であり、そこに属しているというアイデンティティーを持てず、地域の帰属意識も薄いと考えられる。それによって、その後の人格形成及び価値観にも大きな影響を与えていることが窺える。

はじめに

中国では1978年に「改革開放」政策が導入されて以来、沿岸部の諸都市の一部は経済特区として開放され飛躍的に発展するに伴い、経済成長にとって大量の労働力が必要だった。一方、1982年の「人民公社」「解体が決定されるとともに、「農家経営請負制」²が導入されたことから、中国の農村には余剰な労働力が大量に生み出された。それによって、80年代後半から出稼ぎ者が農村から沿岸都市に大規模に移動し、「民工潮」³と呼ばれる現象が起きた。しかし、中国の「二元戸籍制度」⁴という制限により、多くの農民は子どもを農村に残して単身で出稼ぎに行き、出稼ぎ親と離れ離れとなったことから農村に残された子どものことを「留守児童」 5と呼ばれるようになった。

^{1 「}人民公社」: 1958年に創設された中国農村の行政・経済機構。農業集団化に成功した中国は、1958年なかばごろから従来の農業生産協同組合を合併させ、工業、農業、商業、学校、民兵の各組織を含み、またいままでの郷(ごう)政府のもっていた行政機能をもあわせもつ人口数万にも達する一大コミューンをつくり始めた。1978年に生産責任制が導入され、1982年に現行の中華人民共和国憲法が制定され、従前の郷政府制が復活し公社から行政権能がなくなったことにより、ほとんどの人民公社は、遅くとも1983年までには解体されたが、南街村のように解体されなかった人民公社も存在する。

² 「農家経営請負制」:農家が政府と請負契約を結び、収穫の余剰分を自由に売却できる制度。中国は、人民公社による集団所有体制に代わって、1970年代末頃から導入された。

³ 「民工潮」: 中国の農村地帯から広州、上海、福州など沿岸部の大都市に向かう出稼ぎ農民の大移動をいう。出稼ぎ農民は 1980年代後半から盛んになり、当初は無秩序な都市への流入は「盲流」と呼ばれたが、ここ数年は改革・開放路線による経済発展に伴う必然的な現象として定着し、呼び方も民工潮と変った。

2000年以降、留守児童の人数が大幅に増加したことで、その存在も中国社会で認識されるようになった。しかし、新聞などのマスメディアは、留守児童を自殺や不慮の事故(交通事故、火事)、性的暴力の被害などと結びつけて頻繁に報道するため、中国社会は留守児童に「問題児集団」というレッテルを貼ることが多い。そして、留守児童自身も社会から与えられたレッテルに囚われるとともに、そのような自己から抜け出すことが難しいため、社会変革の主体になるとは考えにくい。一方、パウロ・フレイレ(2011)は、被抑圧者こそが、批判的に抑圧の構造を捉え返し、その構造を変革する主体となるべきだと主張している。つまり、留守児童が自分たちの置かれている現状をよく理解し、それを批判的に捉え返すことができれば、能動的にその社会構造を変えていく主体となることも可能なのである。

対話的問題提起学習は、対話を通して参加者が自己と社会とのつながりを認識し、主体 性の獲得を可能にする学習方法である。周(2019:2020a:2020b:2021)は、この対話的 問題提起学習を援用して、元・現留守児童が自分の留守児童経験を新たに意味づけること によって、自らを留守児童経験から解放し、社会変革の主体として自己を形成していく可 能性があることを報告している。つまり、対話的問題提起学習によって、参加者が対話を 通して否定的に捉えていた過去の留守児童経験を肯定的に意味づけることができ、その結 果として、自己を、支配的言説をそのまま受け入れる受動的な客体から支配的言説及び社 会のあり方を批判的に捉え返す能動的な主体に変えていくことが示されている。しかし、 周が対話した対象者の中には、留守児童として生まれ育った農村社会及びそこでの生活経 験を全面的に否定的に意味付けていた現留守児童がいた。つまり、社会の支配的言説をそ のまま受け入れ、自分の留守児童経験を否定的に捉えている。なぜ自分が生まれ育った農 村社会及びそこでの生活経験を否定的に捉えているのか。このような現留守児童にとって、 周との対話的問題提起学習はどのような意味があるのか。この問いに答えるために、本稿 では、先行研究を踏まえて、現在の留守児童経験を否定的に捉えている現留守児童(武、 仮名)を対象に、農村社会に対する否定的な捉え方の具体像及びその認識が形成される過 程を解明した上で、周との対話的問題提起学習による対話の新たな意義を明らかにするこ とを目的とする。

^{4 「}二元戸籍制度」:中国の戸籍制度は、制度の形成期(1949年~1958年)、厳格な統制の時期(1958年~1978年)、部分的な緩和の時期(1978年~現在)という変遷を辿ってきた。1958年の戸籍登記条例により、「農村戸籍」と「非農村戸籍(都市戸籍)」は厳格に区別され、農村住民と都市住民が、全く異なる社会的な待遇を受けるという「二重社会構造」が定着した。(https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_1166402_po_071003.pdf?contentNo=1)

⁵ 「留守児童」: 現在の「留守児童」の定義は90年代後期に形成され、本稿では2010年の中国全国婦聯の計算基準に基づいて、父母両方もしくは片方が6ヶ月以上都市部に出稼ぎに行き、戸籍登記地の農村部に残された18歳未満の子どもを指すことにする(全国婦聯2013)。

I 先行研究

本節では、まず、中国の現留守児童の生活現状及びそれに対する認識を調べた先行研究を概観する。次に、対話的問題提起学習を援用した中国の留守児童研究を紹介する。最後に、本稿の研究課題を明らかにする。

1. 中国の現留守児童の生活現状及びそれに対する認識の先行研究

中国国内では留守児童の生活現状を調査した研究はかなりの蓄積があるが、ここでは陳(2014)、徐他(2017)と周(2018)を取り上げて、ここ十数年の留守児童の生活現状を概観する。

陳(2014)は、福建省の永泰県の義務教育に在学している留守児童17032人(中学校9030人、小学校8002人)を対象に質問紙調査と家庭訪問で留守児童の生活現状を調べた。調査の結果、留守児童は長期間親と離れて生活しているため、親に対して不信感を持ち、親子のディスコミュニケーションが生じていることが分かった。それに起因して留守児童の性格が敏感になり、周りの人や社会に対しても信頼感が低く、心理的な問題が生じやすいと指摘されている。さらに、留守児童の監護者の多くは高齢者であるため、十分な教育とモニタリングができず、全留守児童の7.05%が「問題児童」になっていることも明らかにされた。

徐他(2017)は、江蘇省の100名の留守児童を対象に、質問紙調査と家庭訪問で留守児童の生活現状を調べた。調査の結果、親と会う機会が少なく、親子のディスコミュニケーションが生じ、家庭教育も欠けているという原因から、留守児童は心理的な問題、教育問題、栄養失調の問題、行動規範の問題と安全問題に直面していることが分かった。

以上の先行研究から、留守児童の生活現状が深刻であり、留守児童は多くの問題を抱えていることが分かった。また、従来の研究の多くは留守児童の生活環境及び彼らの生活経験を良くないものとして捉えていることが窺われる。一方、留守児童の生活現状及びそれに対する認識について、当事者の声を取り上げて調査したものには周(2018)がある。

周(2018)は、共通の留守児童経験を持つ元留守児童と現留守児童を一つの集団として捉え、次の二つの仮説を立てた。(1)元留守児童と現留守児童では、生活現状が違う、(2)元留守児童と現留守児童では、生活現状に対する認識も違う。元留守児童2人と現留守児童2人にインタビューを行い、そのインタビューの内容をデータとして質的に分析した。分析の結果、元留守児童と現留守児童の生活現状およびそれぞれ生活現状に対する認識が異なることが分かり、この二つの仮説は妥当な仮説であることが分かった。元留守児童の2人は、大人の農業活動を通して様々な生活スキルと知識を身につけ、自分を成長させてくれる経験だと留守児童経験を肯定的に意味づけ評価している。一方、現留守児童の二人は、親の出稼ぎと農村の都市化により、経済的にも物質的にも豊かな生活を手に入れることができたとして、留守児童経験を積極的に捉えている。

周(2018)から留守児童が自身の生活経験を捉え直すことによって、過去の生活を意味づけるだけでなく、現在の生活を見直し、将来の生活に向けての展望にもつながることが分かる。したがって、当事者による自身の生活経験の捉え直しが大事であると考える。

2. 対話的問題提起学習を援用した中国の留守児童研究

対話的問題提起学習を援用して、中国の元、現留守児童を対象に行われた先行研究には、 周(2019)、周(2020a)、周(2020b)と周(2021)がある。以下では、この4つの先行研究を報告する。

周(2019)は、対話的問題提起学習を援用して、元留守児童(周と静)が対話を4回行った実践研究である。周と静は対話を繰り返すことで、留守児童問題をはじめとする諸問題を一つ一つ辿り、全ての問題のつながりを認識し、お互いの過去の留守児童経験を新たに意味づけた。そして、そのつながりを辿っていく過程で、留守児童問題は自然発生的な現象や変えられない問題ではなく、構造的に作られたものであることを認識するようになった。最後に、二人は留守児童が生まれる社会構造を深く認識した上で、主体的にその社会構造を変えていくことに向けて働きかけていることが分かった。

周(2020a)は、対話的問題提起学習を援用して、元留守児童(周)と現留守児童(玲)が対話を4回行った実践研究である。対話の初めでは、周の留守児童経験を辿ることによって、玲は自分の留守児童経験を捉え返したが、自分が直面している現象を単一の要因または所与の現実として認識し、自己の生存と農業との繋がりを認識することはなかった。そして、周は玲の将来の生き方(ネットショップの運営)という話題をきっかけにして、ネットショップの普及による社会現象を一連のつながりとして描き出し、さらにそれを踏まえて農業の衰退による人々の生活への影響を述べた。こうした周の一連の働きかけによって、玲は、最終的に、自己を起点にして自分の生存の危機と他者・世界とのつながりを認識し、農業の重要性に気づいた。

周(2020b)は、対話的問題提起学習を援用して、元留守児童(彩と周)が対話を4回行った実践研究である。対話の初めでは、彩は過去の留守児童経験を封印しようとして、周の質問に対して感情のこもっていない「対話」が進み、留守児童経験を周との間で共有することに抵抗を示した。しかし、彩の周囲でも起きた「キャンパスローン」をめぐる話題を周が導入したことをきっかけとして、彩は自己と社会とのつながりを実感し、能動的に対話に関わり始めた。そして1年後ついに、彩は自身の留守児童経験を文字化して周と一緒にそれを捉え返すことで、留守児童当事者として自分を取り巻く世界の現実に向けて自ら主体的に働きかけようとする意志の形成が窺われた。

周(2021)は、過去の留守児童経験を肯定的に意味づけている元留守児童(健、仮名)を対象に、周と対話的問題提起学習を3回行った実践研究である。健は、対話の最初から、自身の留守児童経験を楽しい経験として肯定的に評価し、周を圧倒するほどの語りを繰り返した。それは、彼の家族から聞いていた他者との交流を好まない、寡黙な青年像とは全

く違うものであった。周との対話の過程で、一つ一つ自分の思いや考えを言葉にしていった。「都市の人々は金儲け至上主義だ」、「都市の人々の職業倫理はひどい」、と出稼ぎ先の都市に関する人やものに対して否定的に捉えていた。一方、「自分の畑さえあれば最低生きていける」、「村の人々は互いに助け合う」、「自分は村に帰って中高年向けのマイルドな麺を提供するレストランをやりたい」、と生まれ育った農村に関する人やものに対して肯定的に捉えていた。このように、健は子ども時代から現在、そして未来を捉え返し、自分を一貫した存在として認め、これまで拡散していたアイデンティティーが確立された。

以上の周の研究(2019; 2020a; 2020b; 2021)は、対話的問題提起学習に基づいて対話 を繰り返すことで留守児童は元・現にかかわらず社会変革の主体として自己を形成してい く可能性があることを実証した。周(2019; 2020a; 2020b)の調査協力者は、全て最初は 自分の留守児童経験を否定的に捉えていたが、対話を積み重ねることで自身の留守児童経 験を捉え直すことができた。ところが、調査協力者は全員女性であり、女性は男性に比べ ると留守児童経験の負の影響が小さいと言われている(謝2016)。また、周(2021)の調査 協力者は男性であるが、対話の初めから自分を取り巻く農村社会及び自身の留守児童経験 を肯定的に捉えていた。一方、本稿の調査協力者である現留守児童(武)は男性で、かつ、 親の出稼ぎ地の都市に関する人やものを肯定的に評価するが、自分が生まれ育った農村社 会を全面的に否定的に捉えていた。このような現留守児童は自分を取り巻く農村社会に対 する否定的な認識とは具体的にどのようなものなのか。また、そのような認識を形成され るまでにはどのような生活環境で育てられ、どんな経験をしてきたのか。さらに、周との 間でなされた対話的問題提起学習は、武にとってどのような意味があるのか。武の留守児 童経験に対する否定的な捉え方の具体像及びその認識が形成されるまでの過程を解明し、 周との対話的問題提起学習による対話の意義を明らかにする。以上の目的を踏まえて、本 稿は以下の研究課題を設定した。

課題1:自身の留守児童経験を否定的に意味づけている現留守児童(武)は自分を取り 巻く農村・農民・農業をどのように捉えているのか。

課題2:武は、これまでどのような生活環境で育てられ、どのような経験をしてきたのか。

Ⅱ 研究方法

1. 調査協力者

調査協力者(武)のプロフィールは以下の表1のとおりである(黒の太字は留守児童期間、下線部は流動児童⁶期間を表す、年齢は調査時の情報である)。表1の後には武の生活環境についての詳細情報である。

 $^{^6}$ 「流動児童」:居住地と戸籍登記地が異なっていて、しかも戸籍登記地から離れて 6 ヶ月以上の 0 ~17歳の子どもを指す(百度百科24版 1 ページ(2021年12月 6 日)より、筆者翻訳)。

表 1 調査協力者のプロフィール

0歳~7歳 父親は出稼ぎ、母親と二人の姉と武は農村で暮らしていた。

8歳~11歳 両親とも広州 (広東省) へ出稼ぎに行き、武も出稼ぎ先の学校に通っていた。

11歳~15歳現在 父親は出稼ぎ、母親と二番目の姉と農村で暮らしていた。

現留守児童である武は、2003年に末っ子として生まれた。農村では男尊女卑の観念を強く持っている人が多く、男の子で末っ子の武は、生まれたときから家族や周りの人に可愛がられている。武の父親は建設関係の農民工として年中都市へ出稼ぎに出ていて、年に1回か2回家に帰ってくる。武の母親は武が生まれるまでは農業をやっていたが、その後武の父親とともに広州へ出稼ぎに出た。対話時は武の母親は農村に戻ってきて地元で小さな八百屋を経営している。武は8歳から11歳までは両親の出稼ぎ先で滞在してから、都市で見かけたりや聞いた中で成功したIT技術者や起業家に憧れるようになった。そこで、武は中学校から自分で携帯のソフトウェアを開発して、インターネットで販売することもあった。普段両親と交流することがほとんどなく、いつも2階の部屋で携帯やパソコンで遊んでいた。武が子どもの頃に筆者(以下は、周)と面識があるが、ほとんど会話をしたことがない。しかし、今回周が訪れた時は、武は快く調査を引き受け、毎回1時間以上に及んで話をしてくれた。武の親も「普段は私たちと全然話さないのに、なぜあなたといっぱい話せるのか」と不思議に思っていた。

2. データ収集

本稿は、岡崎(2009)の対話的問題提起学習における対話ステップを踏まえて対話を行なったが、データ収集方法として実施したため、適宜改変を加えている⁷。

2017年8月から2018年8月にかけて、周は調査協力者の武との間で対話的問題提起学習による対話を4回行なった。毎回の対話は60分から90分間であった。武は周と同じ出身地であるため、地元の方言で対話を行なった。対話の内容は調査協力者の同意を得た上で全て録音した。

3. データ分析

対話的問題提起学習で行った対話の内容は全て文字化した。文字化に際し、中国語(普

⁷ 本稿で実施した対話的問題提起学習の手順は以下の通りである。

第1回の対話は、調査協力者に対して、まず周が自身の過去の留守児童経験をもとにまとめたライフストーリー・テキストを読んでもらい、その後、その内容に基づいて調査協力者との間で留守児童及び流動児童経験を振り返りながら対話を行なう。対話が終わった後に、調査協力者にも自分の幼少期の留守児童と流動児童の経験をもとにライフストーリー・テキストを作成してもらい、次回の対話の素材として使う。第2回の対話は、調査協力者が作成したライフストーリー・テキストに基づいて、第1回の対話と同じ流れで周との間で対話を行なう。第3回の対話は、周と調査協力者が過去行った2回の対話を振り返り、互いが気になることや気づいたことについて出し合い、さらに対話を進めていく。第4回の対話は1年後に実施し、過去3回の対話を振り返り、調査協力者の考えにどのような変化があったかをめぐって話し合う。

通話)に直してから日本語に訳した。

まず、課題(1)「自身の留守児童経験を否定的に意味づけている現留守児童(武)は自分を取り巻く農村・農民・農業をどのように捉えているのか。」という問いに答えるために、武が自分の生まれ育った農村と親の出稼ぎの都市との比較に関する対話内容のデータ(下線部)を抽出し、質的に分析した。

また、課題(2)「武は、これまでどのような生活環境で育てられ、どのような経験をしてきたのか。」という問いに答えるために、武のこれまでの成長プロセス及び生活経験に関する対話内容のデータ(下線部)を抽出し、第1回の対話後に武が書いたライフストーリー・テキストをメインデータとし、周が書いたライフストーリー・テキストを補足データとして使用した。抽出したデータを読み込み、質的に分析した。

Ⅲ 分析結果と考察

1. 研究課題1の分析結果と考察

本節では、課題1に答えるために、武が留守児童として経験した農村社会と、流動児童として経験した都市社会についての捉え方を3つの面((1)農村 VS 都会、(2)農民 VS 都市の人、(3)農業/体力労働 VS 第二・三次産業/IT 産業)から比較しながら述べていく。

(1) 農村 VS 都会

- 01 周:実家の町に戻ってきた時、どう思った? 何か変化を感じていた?
- 02 武: <u>この町に対して全く印象がなくて、自分の家の周りだけ覚えていた。</u>当時幼かったし、母は遠いところには行かせてくれなかったから、いつも家の近くだけで遊んでいた。
- 03 周:じゃ家の近くには変化を感じていた?
- 04 武:うん。特にお姉さん【周】の家の周りには昔は全部林だったが、<u>そのあと全部ブルドーザーで整地され家が建てられた。それから、昔私が住んでいた家もボロボロになって、窓のガラスが全部割れてしまった。</u>

(中略)

- 05 周:農村のいいところはないの?
- 06 武:特にない。やっぱり広州の方がいいと思う。都市は経済が進んでいるから、 農村は比べられない。また、都市では夜でも電気がずっとついているから、私が 一人で出かけても怖くない。農村の夜は真っ暗で、しかも周りには全部草や木ば かりで、とても不気味な感じがする。昔農村にいたときも、一人で外出するのが 怖かった。

3年後に武が故郷の農村に戻ってきた時、農村と都市の大きな格差に衝撃的だった (04 武)。広州は中国の最も南にある大都市で、1978年の改革開放政策により経済発展の最先端に立つようになり、出稼ぎ労働者が最も多く集まる大都市の一つである。広州で3年間暮らした武は、生活が便利で経済発展が速い都市を評価する一方、不便で経済発展が遅れている農村を批判した (06武)。

(2) 農民 vs 都会の人

- 01 周:じゃ実家に戻って来たばかりの時は農村の生活に慣れていた?
- 02 武:ちょっと慣れなかった。<u>農村の人は何かにつけ悪口を言うから、そのような</u>習慣に慣れなかった。広州の人の方が教養が高い。広州の人はゴミをポイ捨てしなくて、しっかり分類するけど、農村の人はゴミを分類しない。 (中略)
- 03 周:農村の学校に慣れた?
- 04 武: まあまあ。どこの教師も責任感があるから、やっぱり学生の努力次第だと思う。でも広州の学校設備や学校環境は農村の学校よりいい。
- 05 周:広州で友達をたくさん作った?
- 06 武:うん。私のような他の地域から都市に行った子どもがたくさんいた。私のクラスには地元の子どもは2、3人しかいなかったけど、そのうちの一人はよく知っている。彼のお父さんはいつもベンツに乗っていて、とても豪華だった。ある日、私がその同級生の家に遊びに行った時に、初めてベンツに乗った。それは私にとってはとても新鮮だったが、その同級生にとっては当たり前のことだ。彼の家は別荘のようで、とても広かった。プールも、高いスパイラルな階段も、魚を飼っている池もあった。その家は8階建てで、車庫には多くの高級車があった。彼のお父さんはきっと百万長者だろう。私は彼の家に行ったのが初めてだけれど、すぐ惹きつけられて、その家から出たくなかった。彼のお父さんはラップを作っているビジネスをやっているらしい。私はその同級生と一緒に彼のお父さんの工場に遊びに行ったことがあるけど、工場にはたくさんの従業員がいた。その時、彼のお父さんは本当にすごい人だと思った。
- 07 周:じゃ武の両親の仕事とは全然違うのね。
- 08 武: うん、私の両親は時代遅れだと思う。だって今はもうインターネットの時代だから、親はまだ頭を使って仕事ができないし、力仕事しかできない。私は将来勉強ができなくても力仕事は絶対やらない。これからインターネット時代で機械化の時代だから、力仕事はもうなくなるはずだ。父と似ているような仕事があるかどうかを、私も時々インターネットで調べたりもするけど、結構たくさんあった。しかも給料は今より高い。だから父もインターネットで仕事が探せるはずだと思う。なにしろ今やっている仕事よりずっと楽だと思う。

東アジア研究

- 09 周:武は将来どんな仕事をしたいかを考えたことがある?
- 10 武:<u>私は将来絶対力仕事はやらないよ。</u>どんなことができるかを就職する前によく考えてから決める。だって、目標がなければ実行も難しいでしょ。

武は8歳の時に広州に行ったため、故郷の方言もほとんど忘れてしまった。その後、故郷に戻ってきた武は、故郷の方言を完全に理解できなくなり、故郷の方言の発音が悪口のように聞こえてしまい、それを話す農民も教養が低いと指摘した(02武)。また、農村の人の衛生管理を指摘し、都市の人が知識のある文明人だと思い込んでいる。さらに、武が流動児童として両親の出稼ぎ先の広州にいた時に同級生の親の高級車と豪華な家を見て、大きな衝撃を受けたことを語った(06武)。起業して大金持ちになった同級生の親を見ると、武は農業や単純労働しかできない両親を「時代遅れだ」だと批判した(08武)。武は、将来自分の両親のように単純労働や農業をやる可能性を強く否定し、農業及び単純労働をする人は淘汰されると述べた(10武)。

(3) 農業 & 体力労働 VS 第二·三次産業 /IT 産業

番号 発話内容

- 01 周:武は将来何をしたい?
- 02 武:デジタル制御関係の仕事をするよ。でも一旦その領域に入ると、一生もこの 仕事をやらなきゃいけない。そう思うとまた少し悔しい。
- 03 周:どうして悔しいと思うの?
- 04 武:一生も同じ仕事をするから、好きじゃない。
- 06 武:うん。
- 07 周:例えば?
- 08 武:コンピューターを学んだり、携帯を修理したりするとか。
- 09 周:携帯を修理するというのは、携帯を解体するということだよね?
- 10 武:もし携帯の修理を学んだら、携帯が壊れた時は自分で修理できる。もしコンピューターを学んだら、携帯に関係するソフトを勉強したい。もし今自分でソフトを開発できたら、どんなにかっこいいだろう。私が中学校2年生の時に初めて携帯のソフトを開発した時、同級生の皆が私のことを感心していた。
- 11 周:今までは開発したソフトは全部携帯をロックするものだったよね?
- 12 武:うん。このようなソフトは、Tencent にもあるよ。
- 13 周:一部の人だけではなくて、大衆向けのソフトは開発したことがある?
- 14 武:まだない。私は自分に有利なことしかやらない。利益がないことは絶対やらない。
- 15 周:利益というのは、お金のこと?

- 16 武:大体同じだ。よく知っている人なら、お金をくれなくてもいいけど、くれた らもっといい。
- 17 周: そうか。利益がないとやらないのね。武は商売人に向いているね。
- 18 武:お金が儲からなければやらない。
- 19 周:でも多くの職業は収入が多くないよ。例えば中国では教師のような仕事はほとんどサービスや貢献の職業で、あまりお金が稼げない。
- 20 武:教師はお金を稼げない? 私の同級生は今A師範大学にいるけど、彼は卒業 したら、学校が仕事も紹介してくれるから、待遇がとてもいいらしいよ。将来給 料も結構高いと思う。
- 21 周:○○さん【武と同じ村にいる人】もB師範大学にいる。重点大学⁸だ。
- 22 武:B市にも師範大学があったんだ。私の同級生は中学校を卒業してからあの師 範大学に入った。
- 23 周: すごいね。この社会には収入が高くない職業もたくさんあるけど、そのような職業でもやはり誰かがやらないといけない。じゃ、誰がそのような仕事をするの。
- 24 武:底辺の人、つまり一番下の人たちがやるよ。
- 25 周:どうしてその人たちがやらなければならないの?
- 26 武:彼らはお金を稼ぐためにやらなければならない。<u>だって彼らには能力がない</u>から。

1年後の第4回の対話で、周が将来の進路について武に尋ねた (01周)。コンピューターが普及している現代社会では、コンピューターに関する職業の需要が高まると武が推測し、専門学校に入ってそれに関する専攻を勉強し始めた (02武)。また、武は中学時代から携帯やパソコンに馴染みがあり、携帯のソフトウェアを開発してインターネットで販売した経験もあり、中学校の同級生の中で評価されていた (10武)。しかし、武が作ったソフトウェアは一部の人に向けたサービスであり、他人の携帯をロックしたり、ウィルスを感染させたりするような悪質なソフトウェアである。周の携帯もかつて他人にロックされ、武に頼んで解除してもらった経験がある (13周)。そのようなソフトウェアを作ってお金を儲けることに対して興味を持ち、楽で収入がいい仕事しかやらないと武が強調した (14武、18武)。武の発話を受けて、周は、職種によって収入は異なるが、お金が儲からない仕事でもそれなりに重要な役割を果たしていると反論した (19周)。一方、武は、収入が低い仕事は能力がない人がやることであり、能力がある自分は高収入をもらうべきだと主張した (26武)。

上記の対話に対する分析から読み取れるように、武は「①農村 VS 都会」について、農

⁸「重点大学」:正式名称は中華人民共和国重点大学である。中国の重点大学の定義は時期によって変わってきたが、本稿では中華人民共和国大陸境内の大学のうち、権威のある大学であると政府が認定し、予算の優先分配などの支援を行うものとして選定された大学を指すことにする。(百度百科945版1ページ(2022年3月14日)より、筆者がまとめて翻訳したものである)。

村は経済的に遅れていて活気がないと批判する一方、都市は経済的に進んでいて、賑やかで綺麗だと評価した。また、「②農民 VS 都市の人」について、自分の親を含む農民は能力がなく淘汰された人であると捉えているのに対して、都市で自営業や IT 関係仕事をしている人は能力があって魅力的な人だと捉えていることが窺われる。さらに、「③農業 / 体力労働 VS 第二・三次産業 / IT 産業」について、農業は時代遅れで能力のない人がすることだと低く評価している一方、第二・三次産業 / IT 産業は収入が良く将来性のある職業だと高く評価していることが分かる。

2. 研究課題2の分析結果と考察

課題 2 を答えるために、武の成長プロセスを「(1)0~7歳(留守児童時期)」「(2)8~11歳(流動児童時期)」「(3)12~15歳(留守児童時期)」の 3 段階に分ける。それぞれの段階で武の生活環境を理解するとともに、各段階の生活経験を把握していく。

(1) 0~7歳(留守児童時期)

武と第1回の対話をする前に、周が対話を促すために自分の過去の留守児童経験をもとにライフストーリー・テキストを作成した。下記の内容は周のライフストーリー・テキストから一部を抜粋したものである。

しかし、1980年代の中国は「一人っ子政策」が厳しく取り締まられていたため、公に二番目の子どもを生むことはできなかった。それでも、農村では男の子が女の子より役に立つという観念が根強く、同じ村に2番目、3番目の子どもをこっそり生んだ人もたくさんいた。母も私を産んだあと、政府にばれないように、私を親戚に預けて、父と2人で一時遠くの町へ逃げていた。最後はやはりばれてしまって、持っていたお金を全部罰金として払い、生活が一気に窮屈になってしまった。しかし、おじいさんとおばあさんまたは周りの人からのプレッシャーで、母は男の子を生まなければならなかった。そして私が生まれて約3年後に念願の男の子が生まれた。今回は心の準備はあったが、やはりまた罰金と家も取り壊されてしまった。母は男の子を生むという難しい任務を果たせたが、今後私たち3人の子どもをどうやって育てていくことを両親がもっと心配していた。

以下の対話は、武が上記の周のライフストーリー・テキストを読んだ後の感想を周が求めた場面である。

01武:最初の文章は私の家族の状況と全く同じで、すごくいいと思った。

02周:どこ?例えば?私と武は歳が10つ以上も離れているよ。

03武:【しかし、1980年代の中国は「一人っ子政策」が厳しく取り締まられていたた

め、公に二番目の子どもを生むことはできなかった。それでも、農村では男の子が女 の子より役に立つという観念が根強く、同じ村に2番目、3番目の子どもをこっそり 生んだ人もたくさんいた。母も私を産んだあと、政府にばれないように、私を親戚に 預けて、父と2人で一時遠くの町へ逃げていた。最後はやはりばれてしまって、持っ ていたお金を全部罰金として払われ、生活が一気に窮屈になってしまった。】この文 だ、私の家もそうだった。私が生まれたときにも親は罰金を払ったし、しかも2回も 払った。そして、家の壁も取り壊された。家も取り壊されるだけではなく、罰金も1. 2000元を払われたから、当時はとても不思議に思った。もう一文、【しかし、おじいさ んとおばあさんまたは周りの人からのプレッシャーで、母は男の子を生まなければな らなかった。そして私が生まれてやく3年後に念願の男の子が生まれた。今回は心の 準備はあったが、やはりまた罰金と家も取り壊されてしまった。母は男の子を生むと いう難しい任務を果たせたが、今後私たち3人の子どもをどうやって育てていくこと を両親がもっと心配していた】私の母も1番上の姉と2番目の姉を生んだとき、おじ いさんの態度があまり良くなかった。それは、男の子が生まれなかったからだ。しか し、その後私が生まれて、おじいさんがとても私のことを気に入った。そして親に対す る態度も良くなった、私のことをもっと好きになった。彼らはただ男の子が好きなのだ。

第1回の対話をする前に、周の留守児童経験をもとに作成したライフストーリー・テキストを武に読ませた。武が周の書いた「一人っ子政策」による罰金や家の取り壊し、高齢者の「男尊女卑」に関する文章を読んで、「私の家の状況とまったく同じだ」(01武)と共感を示した。一方、周は武より10歳以上も年上のため、武の反応を見て驚き、より具体的な説明を求めた(02周)。02周の要求を受けて、武は、周との共通経験の「一人っ子政策」による罰金・家の取り壊しを説明し、「当時はとても不思議に思った」と自分の気持ちを表した(03武)。さらに、武は、おじいさんの「男尊女卑」のことについても言及し、自分が男の子として生まれたことで、自分だけではなく両親にも大きな影響を与えたことを説明した(03武)。武の発言から、彼が生まれ育った農村社会は農業を中心としていた社会で、男性は役に立つ労働能力を持ち、家業を継げる存在であったことが窺われる。

「<u>私は悪くも良くもない農村で生まれた。家はそんなに貧しくなかった。</u>兄弟は三人いて、上に姉が二人いる。そのため、皆は私のことを一番可愛がってくれた。」

第1回の対話後に、周が武にも自分の幼少期の生活経験をもとにライフストーリー・テキストを作成するように依頼した。そして、上記の内容は武が書いたライフストーリー・テキストから一部抜粋したものである。

01周:ここに書いてある「私は良くも悪くもない農村に生まれた」ってどういう意

味?

02武: <u>私が生まれたときに家はそんなに貧しくなかったから。テレビもバイクもあった。</u> その時、バイクがある家は結構裕福で、バイクを持っていない家がほとんどだったから。他の家の子どもは雨の日でも歩いて通学していたけど、私はたまに親に学校まで載せてもらっていた。

第2回の対話をする前に、周が武のライフストーリー・テキストを読んで、その内容について具体的な説明を求めていた(01周)。武は、第1回の対話の前に読んだ周のライフストーリー・テキストから読み取れた周の幼少期の生活環境及び自分が住んでいる村全体の生活状況から見て、一部の家電製品を持っている自分の家庭状況は良くも悪くもないと捉え返した(02武)。

上記の内容から、武は「①0~7歳(留守児童時期)」で「男尊女卑」の観念が強い農村で生まれたが、末っ子で男の子として生まれたため家族や周りの人に大切にされながら育てられたことが分かる。また、全体的に経済が遅れている農村でも、他の家に比べて武は自分の家庭状況を見直し、当時の生活状況について満足していたことが読み取れる。

(2) 8~11歳(流動児童時期)

「(小学校) 2年生のときに、ちょうど私が8歳で、親が家を建てるために広州へ出稼ぎに行った。仕方なく、私たちも転学して、広州の学校に入った。広州は大都市で街が多く、現地の学校に通っていたときは、最初そこの生活環境に慣れなかった。そこの人たちは全部広州の方言で話すから、私は最初とても戸惑っていた。学校にいるときも、同級生たちは数字さえ方言で話していたから、授業用語も全部方言でやっていた。幸いなことに、大半の先生は普通語で授業をしてくれた。広州の学校環境も昔の学校と全然違って、トイレさえ便所ではなく、座り式のトイレだったから、しばらく慣れなかった。その後、約2、3年が経ち、私が4年生になったとき、やっと少し現地の方言が話せるようになった。その時は自分さえ信じられないほど、とても興奮していた。だんだん広州の生活に慣れてきて、友達もたくさんできた。」

第1回の対話後に武が書いたライフストーリー・テキストの大半は流動児童時期の経験であった。武は両親の出稼ぎ先である広州で約3年間生活した。上記の内容は武が親と共に広州へ行ったばかりの時に起きたカルチャーショック(方言や学校施設の違い)について書いたものである。

01武: そう、8歳だった。<u>初めて広州に行った時、学校はとても広くて、豪華だった。</u> 学校のホールも広かったし、教室のあるビルも高くて、学校の廊下もとても長かった。 初めて学校に行った時は迷っていて、トイレに行きたかったが、場所を見つけられなかった。何度角を曲がっても見つからなくて、その後同級生に会ってトイレの場所を教えてもらった。トイレに入ったら、トイレは自動水栓式の便所であることに気づいた。それを見て、私はどうやって小便するのか分からなくて、仕方なく家に帰るまでずっと我慢していた。初めてそういう自動水栓式の便所を見たから、どうやって使うのも分からなかった。当時は1年生だったし、背も小さくて、自分の身長はその便所より少しだけ高かった。

02周:授業中は先生の話は聞き取れていた?普通話(標準語)を使っていた?

03武:授業中は普通話(標準語)。いや、普通話(標準語)を使っていなかった。<u>たと</u> えば、数字1,2,3,4,5,6,7,8 (広州の方言で発音した)。私もいまだに (広州の方言の発音) 言える。その時先生は私のことを「○○さん」と呼んで、つまり 広州の方言で呼ばれていた。最初聞いた時、私が全然気づかなかった。そこで先生が 私のことを見ながらもう一度呼んだが、私は何も気づかずただなぜ私のことを見ているかすごく不思議に思っていた。そこで、「なぜ先生がずっと私のことを見ているの?」と、私が隣に座っていた同級生に聞いた。彼は「先生があなたのことを指名している よ。バカ」。

(中略)

04周:農村の学校では授業をするときは先生が方言を使っていた?

05武: そう、普通語は全然話さなかった。私も広州に行く前はそんなに深く考えていなくて、向こうの学校の先生も実家と同じ言葉で話すと思っていた。しかし、実際にそこ(広州)に行ってみたら、後悔した。

06周:(親と広州に行くことを)後悔していたの?

07武:うん、私はそんなことになるとは思わなかった。特に言葉。言葉の問題で頭を悩ました。そんな方言は分かるはずがない。今振り返ってみると、そのときはよく乗り越えたと思う。当時は本当にどうしたらいいか分からなかった。そこの方言は難しすぎて、全然分からなかった。母も全部分からないし、話すのもめちゃくちゃだった。父だけは少し分かっていたが、母は普通語さえもうまく教えてくれなかった。私の広州方言は全部同級生から学んだ。私は普通語で同級生たちに話しかけても、彼らは全然答えてくれなかった。仕方なく、私が彼らに合わせて広州方言を話すようになった。同級生は現地の人だから、外から来た私に合わせてくれるわけがないから、私が彼らに合わせるしかなかった。

武が書いたライフストーリー・テキストを踏まえて、両親の出稼ぎ先の広州の小学校に行ったばかりの時の様子についての具体的な説明を周が武に求めていた。そして、広州で通っていた学校は農村で通っていた小学校と比較できないほど異なっていたため、初めて登校した時の驚きと戸惑いを説明し、大きなカルチャーショックを受けていたことが読み取れ

る (01 武)。また、武が広州での学校生活の語りから、流動児童として現地の方言が話せないため、それによって現地の学校で同級生や教員からの差別を受けていたことも窺われる (03武)。そのような経験をした武にとっては、出稼ぎに来たばかりで普通語さえ上手に話せない両親にも頼れず、なんとか自力で新しい言語と生活環境に慣れる努力をしていたことが分かる (07武)。そこで、広州に行ってから1年後に武はようやく現地の方言を習得することができたので、学校生活に馴染み、現地の人々に対しても親近感を抱くようになった。

上記の内容から、武は「 $28\sim11$ 歳(流動児童時期)」に両親の出稼ぎ先(広州)で過ごした生活は次のようにまとめられる。最初の1年間は、現地の方言と学校生活に慣れず、大きなカルチャーショックを受けていた。自分がその環境で生きていくために現地の方言を習得し、周りの人と良好な関係を作るしかないことに気づいた。そこで、武は新しい生活環境に対して自ら合わせることを決心し、最終的に現地の方言と文化に適応していったことが分かる。

(3) 12~15歳(留守児童時期)

「<u>実家に戻った後、また以前の生活に戻った。私が帰ってきて1年間留年したから、</u> 二番目の姉はもう私と同じ学校じゃなくなった。毎日一人で学校に行って一人で帰ってくる、その繰り返しだった。中学校に入ると、友達もできて、人間関係も少し広がった。学校ではいつも一人で行動していて、たくさんの人と一緒に行動するのが嫌い。 大体2、3人の仲間だけと遊ぶ。

私は今の生活に対してまあまあ満足している。時間が経つにつれて、自分も大きくなるにつれて、親のこともくどいと感じてきた。何でも構ってくるから、本当にたまらないのだ。いずにせよ、私は自分の歩みたい道を見つけて、自分の好きなことをする。これが自由だということだ。」

武のライフストーリー・テキストの最後の部分は、両親の出稼ぎ先の広州から故郷の農村に戻ってきた後の生活現状について書いている。両親の仕事の関係で、武は3年間広州で生活した後に再び故郷に戻ってきた。農村の学校と広州の学校で教わった教科内容が違うため、武が農村に戻ってきた時、1年間留年してしまった。いつも一緒に登下校していた2番目の姉も中学校に上がり、かつての同級生も学級の違いで仲間はずれにされたため、しばらく一人ぼっちの学校生活を送っていたと武が振り返っていた。しかし、時間が経つにつれて、武は農村での生活にも慣れ、学校での人間関係も広がった。また、武が思春期を迎えるにあたって、子どもから大人へと自分を確立する時期であり、両親の干渉に対して抵抗感を示していることが読み取れる。

01武: そう、ちょっと待って、この文、【特に父のような農民工は、給料は毎月ではな

く、一つの建設工事が全部終わった後に精算するのが普通だった。運がいいときは1 回で全部の賃金がもらえるが、運が悪いときは払う時期をずっと延ばされて、1年中働いても1元ももらえないこともあった。年末になると、父はよく他の同僚と毎日請負人のところへ駆けつけて、賃金の支払いを要求しに出かけていた。賃金がもらえないときには、時々相手とけんかすることになる場合もよくあった。】私の父もよく賃金がもらえなくて、この間帰ってきた時もそうだった。「外であんなに長く働いたのに、なぜ何百元しか持って帰って来なかったのか」、と母が文句を言っていた。その残りの分は今度払ってくれるって父が言っていたけど、私はとても不思議に思った。どうして相手のために働いたのに、賃金をくれないのか、すぐ賃金を払ってもらうべきだと思う。昔はこのようなことに対しては全く関心がなかったから、私は何も聞かなかった。(中略)

02周:私の父もそうだ。毎年のお正月になるとバイクに乗って請負人のところに賃金を請求しに行く。平日は時間がないし、その主人も家にいないから、お正月の時だけ皆家にいる。でも子どもの時はそのことに気づかなかった。他の同級生の親は全部普通の仕事をしていて毎月給料がもらえたけど、私たちの父親の仕事はちょっと特殊だと思っていただけだ。武はこれまで親の仕事のことについて考えたことがある?03武:これについては知ろうともしなかった。全部大人のことだから、知るすべもない。例えば、母が毎日どんな野菜を仕入れて、どんな野菜を売っているか、私は全然知らないし、野菜の名前も分からない場合がある。「ヨモギ」という野菜があって、それは何の野菜か、とこの間母に聞いてみた。初めてその野菜の名前を聞いたからよく分からなかった。標準語で言ってと母に要求したが、母はそれを標準語で言えなかった。

武の父親は広州から戻ってきてもまた他の都市へ出稼ぎに行っていたが、母親は農村に残って小さな八百屋を経営していた。周のライフストーリー・テキストに書いている父親の給料不払いの話を読んで、武が自分の父親も共通の経験があることに気づいた(01武)。普通の仕事では「働けば給料をもらえる」というのが常識であるが、自分の父親は一生懸命に働いても給料がもらえないということについて、武は「私はおかしいと思った。どうして相手のために働いたのに、給料をくれないのか、すぐ給料を払ってもらうべきだと思う。」と自問自答をした。すなわち、武は周が書いたライフストーリー・テキストの内容(父親の給料不払い)に触発され、初めて自分の父親の給料不払いを能動的に捉え返したと言える。また、武は母親が経営している八百屋で毎日売っている野菜の名前も知らなかった。つまり、武は農民工の父親の仕事に対しても、小さな八百屋を経営する母親の仕事に対しても、全く関心を持っていなかったことが読み取れる。

以上のことから、武は「 $312\sim15$ 歳(留守児童時期)」に広州から再び故郷の農村に戻ってきた。最初の「 $10\sim7$ 歳(留守児童時期)」に比べて、武の生活環境と周りの人間関係にも変化が変化が起こり、それによって2回目の留守児童経験も異なっていることが読み取れる。

おわりに

本稿では、対話的問題提起学習を援用して留守児童経験を持つ元留守児童の筆者が現留守児童(武)と対話を4回行い、2人の対話内容から抽出したデータを質的に分析した。分析の結果、武が自分の生まれ育った生活環境(農村・農民・農業/体力労働)を低く評価している一方、両親の出稼ぎ先の生活環境(都市・都市の人・第二・三次産業/IT産業)を高く評価していることが分かった。

上記のような認識を形成するまでの武の成長プロセスは、 $(1)0 \sim 7$ 歳(留守児童時期)、 (2)8~11歳(流動児童時期)、(3)12~15歳(留守児童時期)の3段階に分けられることが分 かる。まず、(1)0~7歳(留守児童時期)は、武が「男尊女卑」の観念が強く経済的にも 遅れている農村で生まれたが、家族や周りの人に大切にされながら不自由なく育てられて いた。生まれた時から対話時の15歳までほとんど農業の生産活動に参加したことがないた め、自分を取り巻く農村・農民・農業を知る機会もなかった。次に、(2)8~11歳(流動児 童時期)は、武が流動児童として両親の出稼ぎ先(広州)で過ごした。最初は、現地の方 言や学校生活に慣れなかったが、徐々に都市の利便性と経済的な発展ぶりに圧倒された。 その後、武は現地の言語を習得するとともに、周りの人と良好な関係が構築されたため、 都市に対して高い帰属意識が窺われた。最後に、(3)12~15歳(留守児童時期)は、武はま た故郷の農村に戻ったが、両親をはじめ農村の人やものに対して抵抗感を示し、自分の生 活現状を否定的に捉えていることが読み取れた。このように、武は農村に生まれ育ったに もかかわらず、農村・農民・農業という社会文脈と完全に切り離された結果、自分が農村 の一員であり、そこに属しているというアイデンティティーを持てず、地域の帰属意識も 薄いと考えられる。それによって、その後の人格形成及び価値観にも大きな影響を与えて いることが窺える。

武にとって周との対話的問題提起学習の意義として、自分を取り巻く社会のあらゆる人・こと・ものを捉え直すきっかけになったことにあると考えられる。武は周と対話をすることによって、農村の男尊女卑の根強い観念、「一人っ子政策」違反による罰金・家の取り壊し、父親の給料不払いなど一連の出来事を、初めて「不思議だ」「おかしい」というように捉え直した。言い換えれば、武は、これまで自分を取り巻く農村及び自分の家族に対して全く関心を示さなかったが、共通経験を持つ周との対話を通して自分の周りの人々に関心を持ち、目を向けるようになったと言える。このようにして周とさらなる対話を積み重ねることで、武は自分を取り巻く社会のあり方を批判的に捉え返し、能動的に社会に働きかける主体へとして自己形成していくことも期待できるだろう。

本稿では自分の留守児童経験を否定的に捉えている現留守児童(武)の成長プロセス及び生活経験を明らかにし、生活経験が留守児童に与える影響を質的に分析した。本稿及び周(2019;2020a;2020b;2021)の分析結果から分かるように、それぞれ留守児童の生活経験が異なっていても、対話的問題提起学習による対話を積み重ねることで、留守児童は

社会変革の主体として自己を形成していく可能性があることを実証した。一方、中国の農村における都市化が急速に進んでいる。それによって農村で生まれ育った留守児童の生活環境も大きく変わってきた。近年、留守児童の親の出稼ぎ先は中国国内にとどまらず、日本をはじめ海外にも広がっている。今後は調査協力者の範囲をさらに広げて、対話的問題提起学習を援用してその意義を検証していきたい。また、本稿の調査協力者の武と対話的問題提起学習による対話を定期的に実施していくことも今後の課題である。

参考文献

Freire, P. (1970) Pedagogia do Oprimido. (三砂ちづる訳 (2011) 『被抑圧者の教育学―新訳』亜紀書房) 岡崎敏雄 (2009) 『言語生態学と言語教育―人間の存在を支えるものとしての言語』凡人社

周亜芸 (2018)「留守児童当事者の視点から見た中国の留守児童問題―元留守児童と現留守児童へのインタビュー調査から―」『文明の科学』第15号 p. 1-16.

周亜芸 (2019)「中国元留守児童における主体性獲得のプロセス ― 対話的問題提起学習を通して ― 」、『文明の科学』16、p. 21-46。

周亜芸 (2020a)「中国現留守児童における主体性獲得のプロセス―対話的問題提起学習を通して―」、『文明の科学』17、p. 15-37。

周亜芸 (2020b) 「対話的問題提起学習による主体性獲得のプロセス — 一人の元留守児童を対象にして — 」、 『華南研究』 6、p. 1-20。

周亜芸 (2021) 「過去の留守児童経験の捉え返しによる未来像の獲得 — 第二世代農民工の元留守児童を対象にして — 」、『文明の科学』18、p. 1-18。

陳娜娜(2014年)「貧窮山区留守児童現状、問題及対策:以永泰県調研結果為例」『福建教育学院学報』第 9 期、p. 17-22。

謝東虹(2016)「留守经历对新生代农民工工作流动的影响—基于2015年北京市数据的实证检验—」」『南方人口』 3、p. 1-9。

徐孟輝・唐秋月・嵇紅濤・張君冬・鄧春萍(2017)「対留守児童生活現状的分析与研究:以江蘇省宿遷市 泗陽県為例」『改革与開放』第22期、p. 80-81。

研究資料「映画の祭りは終わらない」の本誌掲載までの運び

八尋義幸会員が執筆された「映画の祭りは終わらない」は、アジアフォーカス・福岡国際映画祭30年の歴史を振り返るととともに、映画祭を通じて発信された「アジア映画」がいかなる過程や変遷を経て体系的に注目され新作の創造に繋がったのかについて、詳細な記録と史料をもとに丹念に分析されており、「東アジア」「文化行政」「映画論」「郷土史」の観点においても大変貴重な論考である。

以上の理由により、東アジア学会文化部会は本稿を本会企画委員会に『東アジア研究』31号の依頼論文として推薦し、企画委員会及び編集委員会での協議を経た後、依頼論文として掲載される運びとなった。また、30年間にわたる芸術活動と文化行政に関し、体系的かつ時系列に沿って考察されている本稿の主旨を鑑み、本号と次号に分けて掲載させていただくこととする。

東アジア学会 文化部会代表 金縄 初美

〔研究資料〕

映画の祭りは終わらない(上)

一アジアフォーカス・福岡映画祭の始まりから2005年まで一

The festival of movies will not ends: From the Beginning of the Focus on Asia Fukuoka International Film Festival to 2005

八 尋 義 幸 YAHIRO Yoshiyuki

はじめに

2021年3月31日、アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会が解散し、30回続いた映画祭は終了した。アジアフォーカス・福岡映画祭は1991年に始まっているが、私が福岡市の職員となったのは1992年、以後約29年間様々な立場で映画祭に関わってきた。1993年から1996年までは企画委員。1997年から2006年までは総合図書館と映画祭事務局との兼務となった。2007年から2020年までは、総合図書館職員として映画収集を行いながら、カタログ原稿の執筆や映画祭会場での司会などで協力した。本業は総合図書館職員だが、映画祭は兄弟のような存在で、映画のお祭りに関われることは楽しみでもあった。図書館の毎日の地味な仕事からみれば、華やかな存在のお兄ちゃんである。総合図書館は1996年開館なので、5歳年上なのだ。

福岡市の文化事業の上でも国際的に評価された存在だった映画祭について、最も長く近くで見ていたのが私かもと思った時、映画祭の自分なりの総まとめをしてみようと考えた。なぜ映画祭は始まり、どういう経緯をたどり、何故なくなったのか。福岡市に何を残したのか。特に1992年以前、私は福岡市に採用される前は東京が職場だったので、福岡の事情はほとんど知らない。映画祭の立ち上げについては以前から興味を持っていたが、多忙な業務のなかでずっと心にしまったままになっていた。退職し、少し時間ができたので、今のうちに調べられることは調べようと思ったのがきっかけである。本稿では時系列に沿い、映画祭がどのように始まり、どのような変遷をたどったかを中心に考察してみたい。だから上映された個々の作品等については最小限にとどめる。

I 福岡アジア映画祭のはじまり

ところでアジアフォーカス・福岡国際映画祭は、2007年からの名称である。それ以前、

1991年から2006年まではアジアフォーカス・福岡映画祭だった。また前身となる福岡アジア映画祭が1987年に始まり、1990年まで続いている。だからこの映画祭は3つの名前があるという言い方もできそうである。主催者が変わり同じ名称で継続している福岡アジア映画祭については後で述べるが、2007年から"国際"の名を冠したのは、二代目ディレクターとなった梁木靖弘氏の希望による。初代ディレクター佐藤忠男氏の時代には日本名に"国際"はなかった。もっとも英語では最初から、「The Focus on Asia Fukuoka International Film Festival」なので、2007年から英語と日本語を合わせたということになる。だから本文でも2006年までをアジアフォーカス・福岡映画祭、2007年から後をアジアフォーカス・福岡国際映画祭と表記する。そうすると逆になぜ当初"国際"がついていなかったのか気になるところだ。もし意図的に日本名から"国際"を外したとすればそこには、国内向けと海外向けの2つの顔を持とうとしたと推察できるからだ。

国際映連が主導する映画祭のヒエラルキーでは、アジアフォーカス・福岡映画祭は国際映画祭というには規模が小さい。映画業界をよく知る佐藤忠男氏としては、アジアフォーカス・福岡映画祭は東京国際映画祭と比べられるものではない。佐藤氏が全体をコントロールできる規模の映画祭なら、別に"国際"と名乗る必要もないからだ。だだし、映画祭の存在をアジア各国へのシティセールスに使いたい福岡市としては"International"という言葉はほしい。だから映画祭の表記が英語と日本語が違っても良いという福岡市の提案を、佐藤氏は大人の判断で容認したのではと思える。福岡市にとっては初めての事業、佐藤氏も映画祭ディレクターは初めてだ。要は映画祭事業を立ち上げることのほうが大切なのだ。そして映画業界と繋がりのない二代目ディレクターの梁木靖弘氏は、新規さを打ち出すため日本語と英語の表記を合わせようと"国際"の名を冠する。日本名と英語名が一致したのであるから問題があるわけではない。梁木氏の国際映画祭への思いもあったかもしれない。ここに二人のディレクターの映画祭への向い方の違いが少し現れている。

それではアジアフォーカス・福岡映画祭(以後、必要ある場合を除いて「アジアフォーカス」と表記)の前身である福岡アジア映画祭はどのように始まったのか。梁木靖弘氏が2021年9月から2022年4月まで西日本新聞に連載した「さらば、アジアフォーカス」では、2021年10月19日の第12回で下記のようにある。

87年の福岡アジア映画祭は、2年後の太平洋博覧会「よかトピア」を民間から盛り上げようと企画されたもので、西日本新聞社が主催していた。現場の実務を、地元で自主上映活動をしている前田氏に委託したと聞いている。⁽¹⁾

前田氏とは前田秀一郎氏の事。オフィス・ヌーヴェルヴァーグという自主上映団体の代表として、福岡市では有名だった。1987年に始まった福岡アジア映画祭(以後、「アジア映

⁽¹⁾「さらば、アジアフォーカス 映画祭の回顧12 前史(中)」『西日本新聞』、2021年10月19日、朝刊、11ページ。

画祭」と表記)は誰が主催していたのか。1987年8月24日、西日本新聞の「福岡アジア映画祭始まる」という記事によると下記のとおりである。

同映画祭は、2年後に福岡市でアジア太平洋博が開かれることから、福岡国際交流協会、アジア太平洋博協会、西日本新聞社などで組織する実行委員が企画・運営する。 今後毎年開催する予定で、日本のアジアの窓口である福岡を国際映画文化の拠点にしていく考え。(略) 問い合わせは同映画祭事務局 (以下電話番号—引用者)⁽²⁾

記事によれば西日本新聞社が主催者であったことは確かのようだ。ではこの時アジア映画祭実行委員会とその事務局はどこにあったのか。この記事に先立ち1987年8月19日の西日本新聞に「福岡アジア映画祭'87開幕」という映画祭を告知した全面広告がある。そこにはアジア映画祭事務局として、オフィス・ヌーヴェルヴァーグの住所と電話番号が書いてある。アジア映画祭実行委員会について前田秀一郎氏は「単に名前だけです。」⁽³⁾と語るが、この全面広告にはアジア映画祭の総合プロデューサーに今村昌平監督が就任すること、2年後の『アジア太平洋博覧会』の連動企画であることが書いてある。

今村監督に総合プロデューサーを依頼したのは前田氏ではなく東映九州支社である。東映は今村監督の『女衒』(1987年)の公開を控えており、その成功のためアジア映画祭を立ち上げたのだ。当時アジア映画祭で作品選定やボランティアとして参加していた間ふさ子氏は「アジア映画祭のアイデアは西日本新聞社広告局が発案者。西日本新聞と東映九州支社の間で話がまとまり、前田さんが現場運営として雇われた」(4)と語ってくれたが、前田氏は「東映から『女衒』のPRのための映画祭ができないかと頼まれ、今村監督と電話で話した。その時今村監督から『マレーシアで見た映画が面白かった。上映できないか』と言われ、アジア映画祭を東映に提案した。」と語っている。今村監督は総合プロデューサーに就任しているので、東映から事前にアジア映画祭について相談されていた可能性はある。だからアジア映画祭のアイデアは今村昌平監督という言い方もできるかもしれない。ただし今村監督が総合プロデューサーを務めるのは1987年だけである。

東映から仕事の依頼を受けた前田氏は『女衒』のための映画祭という意識が強いが、西日本新聞は最初からアジア太平洋博関連事業として考えていた。だからアジア太平洋博覧会協会も主催に入る。アジア映画祭ならアジア太平洋博覧会の雰囲気作りとして最適である。映画祭の事業費はアジア太平洋博覧会協会から出た可能性はあるだろう。

前田氏は「映画のレンタル料等のお金はアジア映画祭事務局で支払ったが、そのお金は 東映からもらった。」と語る。また「映画祭をやるのは最初は1年だけだと思っていた。映

 $^{^{(2)}}$ 「スクリーンを通じ交流を 福岡アジア映画祭始まる」『西日本新聞』、1987年 8 月24日、朝刊、14ページ。

^{(3) 2022}年9月13日、筆者による前田秀一郎氏へのインタビューから。以後前田氏の発言の引用は、引用を表記しない場合はその時のインタビューもしくはメールによる質問の回答から。

⁽⁴⁾²⁰²²年6月21日、筆者による間ふさ子氏へのインタビューから。

画祭会期中毎日ゲストと飲み会を開いたが、今村監督が東京に帰る前、『この映画祭はいい映画祭だから続けなさい』と言われたので続けることにした」と語っている。しかし、アジア映画祭会期中に出た先の8月24日の西日本新聞の記事には毎年開催予定と記してあり、この記事を前田氏は知らなかった。主催者である西日本新聞や東映等と現場運営である前田氏の間で情報共有がされていなかったことが分かる。

アジア映画の選定や映画祭の運営は前田氏が中心で行っていたので、前田氏は続けて映画祭を開催するのは自分であると考えるようになる。ただしアジア太平洋博覧会の関連イベントであれば当然1988年もあると考えるのが自然だ。前田氏は上映作品の選定から現場運営まで任されていたのだが、プログラムディレクターに近い存在と考えるのが妥当だ。西日本新聞は全面広告の掲載、東映は通常より大きな規模で映画の広報・宣伝ができるというメリットが大きなモチベーションだった事は容易に想像できる。

第1回のアジア映画祭は8月22日に「今村昌平スペシャル」と題して、福岡東映で最新作『女衒』を含む4本の今村監督の特集上映があり、今村監督の舞台挨拶もあった。23日から会場を明治生命ホールに変え、28日まで韓国映画『寡の舞』(1983年 イ・チャンホ監督)や香港映画『望郷』(1982年 アン・ホイ監督)などが上映された。会期、会場、上映本数、観客数の概要は下記の通り。会場、観客数などはすべてアジア映画祭の公式カタログを参照している。

福岡アジア映画祭'87

会期:8月22日~28日(7日間)

上映本数:7か国・地域から16本

会場:明治生命ホール

観客数:3.053人(5)

第1回のアジア映画祭は予算や準備時間の制約のせいでカタログは作られていない。カタログに過去の実績が記載されるのがアジア映画祭公式カタログの特徴だが、後のカタログには第1回の会場名に福岡東映は記載されていない。前田氏によれば「単なるミス」との事である。海外から来たゲストの通訳や、1988年から始まる日本語字幕作成、カタログの英文翻訳は無償のボランティアが担当した。前田氏のボランティアを使って事業を開催する手法はその後も継続する。

アジア映画祭誕生には、博覧会を盛り上げるためという、福岡市の意志が含まれていたのは確実だ。だから福岡市教育委員会文化部は1988年と1989年にはアジア映画祭に100万円の補助金を交付している。⁽⁶⁾ ロードショーを控えた邦画の新作を目玉とし、福岡未公開のアジア映画群というプログラム構成は1990年まで続く。新聞社や興行界、実務を任された

^{(5)「}福岡アジア映画祭の歩み」、第6回福岡アジア映画祭事務局/編(1992年)『第6回福岡アジア映画祭公式カタログ』第6回福岡アジア映画祭事務局、56ページ。

^{(6)「}福岡の二つの映画祭をめぐって、「公」「草の根」の理論にズレ」『日本経済新聞』、1991年9月28日、朝刊、41ページ。

前田氏や、まだ陰に隠れている福岡市の思惑が混在しながら映画祭が立ち上がる。当時の日本では、中国や韓国など特定の国ではなく、アジア映画に特化した映画祭はなかったと記憶している。どんな事情であれアジア映画祭の誕生は画期的なことだ。また梁木靖弘氏がゲストとして参加し講演を行うことが、8月19日の西日本新聞に書いてある。

Ⅱ 福岡アジア映画祭1988年~1990年

第2回のアジア映画祭は会期等の概要は下記となる。

福岡アジア映画祭'88

会期:5月25日~29日(5日間)

会場:明治生命ホール、日立ホール 上映本数:8か国・地域から19本

観客数:3.073人(7)

会期が5月になったのは、翌年開催されるアジア太平洋博覧会が3月17日~9月3日なので、7月や8月ではイベントとして遅いからと考えられる。または福岡市、福岡国際交流協会、西日本新聞社により5月21日~22日に開催された「アジアシンポジウム福岡'88」に合わせた可能性もある。この年アジア映画祭公式カタログが作られるが、巻頭に桑原市長のアジア映画祭開催を祝すメッセージがあり、続いて佐藤忠男氏による長文の作品解説がある。実行委員長のメッセージはない。市長のメッセージは補助金を出した教育委員会から出されている。カタログの最後の編集後記に前田秀一郎氏は次のように書いている。

今回は、予算の都合で、予定していた海外からのゲストの数が激減してしまいましたが、来年は「アジア太平洋博覧会―福岡'89」もあり、思いきり盛大な映画祭にしたいと思っています。これからも末長く応援をお願い致します。⁽⁸⁾

これは主催者の言い方である。福岡市の事業、アジア太平洋博覧会を意識しており事業継続が前提となっている。カタログの発行は「福岡アジア映画祭実行委員会」で、所在地はオフィス・ヌーヴェルヴァーグ内と記してある。実行委員会の構成メンバーも事務局の表記もない。しかし公式カタログを企画・編集したボランティアスタッフは、個人の氏名まできちんと記してある。実行委員会構成メンバーや事務局の表記がないカタログは1990年まで続き、1991年に前田氏が映画祭の主体となった年には、アジア映画祭実行委員会の表記は消滅する。カタログの発行がアジア映画祭事務局となっているだけだ。

^{(7)「}福岡アジア映画祭の歩み」、第6回福岡アジア映画祭事務局/編(1992年)『第6回福岡アジア映画祭公式カタログ』第6回福岡アジア映画祭事務局、57ページ。

⁽⁸⁾前田秀一郎「編集後記」、前田秀一郎・今村ミヨ・花田泉・間ふさ子・松崎恵子/編、(1988年)『福岡アジア映画祭'88公式カタログ』福岡アジア映画祭実行委員会、20ページ。

そして1992年のカタログから再度、アジア映画祭実行委員会が主催者と表記されるのだが、そこには実行委員の名前はすべて書いてある。1990年までは名ばかりの実行委員会だからメンバーの表記の必要はないと前田氏は考えたのだろう。1988年のアジア映画祭実行委員会の構成メンバーを最も表記しているのは、1988年5月23日の西日本新聞である。25日から始まるアジア映画祭のPRのため、座談会がかなりの紙面をさいて掲載されている。前田秀一郎氏が司会をし、アジア映画祭公式カタログにボランティアとして名前がある福岡中国映画会の間ふさ子氏、九州大学大学院の黄偉光氏、同じく九州大学大学院の倪宝栄氏の3名が映画祭の見どころを語っている。そこにはこう記されている。

主催の福岡アジア映画祭実行委員会は財団法人・福岡国際交流協会、財団法人・アジア太平洋博覧会協会、福岡市興行協会、邦画配給会社、洋画配給会社、福岡市の自主上映組織・オフィス・ヌーヴェルヴァーグ、西日本新聞社などで構成されている。⁽⁹⁾

この記事によればオフィス・ヌーヴェルヴァーグも主催者の一人であったことになる。この年のアジア映画祭の問い合わせ先は、オフィス・ヌーヴェルヴァーグ内の「福岡アジア映画祭'88」事務局となっている。つまり、アジア映画祭実行委員会も事務局もオフィス・ヌーヴェルヴァーグ内にあったということだ。1987年と違い東映1社ではなく福岡市興行協会で福岡アジア映画祭を主催することで、福岡市に支社を持つ邦画各社が参加することになった。オフィス・ヌーヴェルヴァーグも自らも主催者であると自己主張している。

この年の日本映画の目玉は東宝の『敦煌』(1988年 佐藤純彌監督)という超大作である。6月25日からのロードショーに先駆けてのお披露目で、上映会場は福岡東宝で5月25日の1日だけアジア映画祭会場となった。26日からは明治生命ホールが会場となり、アジア映画の秀作が上映された。5月20日の西日本新聞紙面では全面の『敦煌』の宣伝広告があり、同じ面で併せてアジア映画祭の告知がされている。1987年は東映だったが、1988年は東宝と西日本新聞が全面広告を出したのだ。日本映画以外は前田氏のテリトリーとなる。一般の観客から見たら、この映画祭の主催者は映画会社とオフィス・ヌーヴェルヴァーグの2者と見えていたのではないだろうか。福岡東宝が会場であることは1988年のカタログには記されているが、その後のカタログには記載されていない。

1989年はいよいよ「アジア太平洋博覧会」の開催である。1989年のアジア映画祭の概要は下記となる。

福岡アジア映画祭'89

会期:5月19日~25日(7日間)

会場:イムズホール

上映本数:7か国・地域から19本

⁽⁹⁾「隣国の今が見える」『西日本新聞』、1988年 5 月23日、朝刊、12ページ。

観客数:4.448人(10)

会場が、この年4月新しく天神にできた商業施設イムズの9階にあるイムズホールに変わった。会場をイムズホールに変えたのは、「イムズから西日本新聞に依頼があった」と前田氏は語る。今最も注目される場所を映画祭の会場とすることはアジアフォーカスでも継続する手法である。だから1990年から始まるアジアマンスのために福岡市の意向が働いた可能性がある。

この年の日本映画特別試写は東宝の『舞姫』(1989年 篠田正浩監督)、東映の『黒い雨』(1989年 今村昌平監督)、松竹の『ハリマオ』(1989年 和田勉監督)と3本もある。イムズ開業とアジア太平洋博覧会開催に映画業界が応えた形だが、映画はアジアと密接に関係する内容ではなくなっている。

アジア映画については佐藤忠男氏が西日本新聞紙面で解説している。イベントの問い合わせ先は変わらずオフィス・ヌーヴェルヴァーグだが、前田氏の露出は1988年より減少する。情報誌『シティ情報ふくおか』の自主上映欄に掲載された問い合わせ先は、オフィス・ヌーヴェルヴァーグと西日本新聞社の電話番号が併記してある。⁽¹¹⁾ 1989年の公式カタログには、1988年と変わらず、アジア映画祭実行委員会がオフィス・ヌーヴェルヴァーグ内にあると記してある。そしてアジア太平洋博覧会は大成功となり閉幕する。福岡市は1990年から開催するアジアマンスの準備に入っていく。

ここで、当時の福岡市の政策について触れておく。もともと福岡市は東アジアの国々と歴史的なつながりが深い。1988年に策定された第6次福岡市基本計画では「海と歴史を抱いたアジアの交流拠点都市」を目指すことが定められている。アジア太平洋博覧会は、シーサイド百道地区開発のため以前から決められていたことだが、1988年の第6次基本計画において正式にアジアをキーワードとした都市作りを行うことを謳う。(12) 言い換えれば「アジア文化による街作り」である。

今ではありふれているが1988年当時、アジアを都市作りの前面に出した都市は他になく、20年後に韓国や中国から大量に押し寄せる観光客を迎える準備が始まったともいえる。もっとも当時そんな未来を予想した人はいないかもしれないが。アジア太平洋博覧会の後、天神地区で毎年9月にアジアマンスが始まるのは至極自然な流れだった。アジア映画祭もアジアマンスのイベントとして想定されていたのだ。

1990年8月31日の西日本新聞夕刊に福岡市が掲載した全面広告がある。そこにはこう記されている。

^{(10)「}福岡アジア映画祭の歩み」、第6回福岡アジア映画祭事務局/編(1992年)『第6回福岡アジア映画祭公式カタログ』第6回福岡アジア映画祭事務局、58ページ。

^{(11)「}自主上映」、藤浦一都 / 編 (1989)『シティ情報ふくおか1989年5月12日 No.225』プランニング秀巧社、52ページ。

^{(12)「}施策の大綱」福岡市総務企画調整部企画調整課/編(1988)『福岡市総合計画 福岡市基本構想第6次福岡市基本計画』福岡市総務企画調整部企画調整課、11ページ。

9月1日から、「アジアマンス」が始まります。このアジアマンスは、昨年開催された「アジア太平洋博覧会―福岡'89」で培った福岡とアジアの友好をさらに深め、市民レベルの国際交流をより一層進めていくため、アジアの文化、芸術、学術など多彩な国際的イベントを9月に集中して行うものです。将来的には市民の秋の一大イベントとして定着させ、「博多どんたく」「博多祇園山笠」に次ぐ第三の市民の祭典を目指します。オープニングを飾る華麗な「アジア太平洋フェスティバル」、アジアの文化・学術分野の貢献者を表彰する「福岡アジア文化賞」、アジア12カ国・地域40作品が一堂に集う「福岡アジア映画祭'90」など24ものイベントが盛りだくさん用意されています。あなたもこの秋、アジアー色に染まってみませんか?(13)

さらに同広告の中でアジア映画祭については下記のように記してある。

1987年以来3回にわたって開催されてきた「福岡アジア映画祭」を継承し、今年はアジアマンス事業として開催します。(14)

「博多どんたく」「博多祇園山笠」に次ぐ第三の市民の祭典を目指すというのだからかなりの力の入れようである。さらに中心となる3つのイベントとして、「アジア太平洋フェスティバル」、「福岡アジア文化賞」、「福岡アジア映画祭'90」が挙げられている。「アジア太平洋フェスティバル」と「福岡アジア文化賞」はともに福岡市が中心となって開催する。「福岡アジア映画祭'90」は過去3回開催されたアジア映画祭を継承すると書かれている。ここにきてようやく福岡市がアジア映画祭開催の中心的存在として顔を見せる。福岡市は助成金を700万円に増額、それまで500万円だった映画祭総予算は2000万円となる。(15) アジア映画祭のプログラムも福岡アジア文化賞を受賞した黒澤明監督の特集などが行われる。

この年のアジア映画祭実行委員会事務局は西日本新聞社企画推進部内と新聞に表記されている。ただしそれでも「映画のレンタル料などの支払いはオフィス・ヌーヴェルヴァーグで行っていた。イムズの観覧料収入や西日本新聞からもらったお金を使った」と前田氏は語る。助成金の受け皿は西日本新聞社だったのだろう。巨額な助成金であり、法人格をもたないオフィス・ヌーヴェルヴァーグでは支出が困難だったのかもしれないが、アジア映画祭事業を翌年から福岡市に譲渡するためという見方もできる。

1991年から正に福岡市が中心となってアジアフォーカス・福岡映画祭が開催されるのだが、福岡アジア文化賞等と違って、なぜアジアフォーカスだけが1年遅れたのかという疑問がわく。まず1990年のアジア映画祭の概要は下記となる。

^{(&}lt;sup>13)</sup>「アジアを深める30日 —明日からアジアマンス。」『西日本新聞』、1990年 8 月31日、夕刊、 8 ページ。

 $^{^{(14)}}$ 「アジアを深める30日 — 明日からアジアマンス。」『西日本新聞』、1990年 8 月31日、夕刊、8 ページ。

^{(15)「}福岡の二つの映画祭をめぐって、「公」「草の根」の理論にズレ」『日本経済新聞』、1991年9月28日、朝刊、41ページ。

福岡アジア映画祭'90

会期:9月1日~9日(9日間)

会場:イムズホール、ソラリアシネマ2、福岡市美術館

上映本数:12国・地域から40本

観客数:5,386人(16)

日本映画は熊井啓監督の『式部物語』(1990年)が参加している。会場は昨年に続いてイムズホールと、1989年に開館した商業ビル、ソラリアプラザにある3つのスクリーンを持つソラリアシネマの1館である。福岡市美術館では国際交流基金提供のタイ映画が上映された。観客数も多く成功だろう。アジア映画祭の公式カタログでは、オフィス・ヌーヴェルヴァーグはカタログの企画・製作となっている。前田秀一郎氏の編集後記も主催者の言い方ではない。カタログ表記から判断する限り実行委員でも事務局の場所でもなくなったことになる。オフィス・ヌーヴェルヴァーグの役割が少しずつ後退している。

Ⅲ アジアフォーカス・福岡映画祭のはじまり

アジア太平洋フェスティバルと福岡アジア文化賞は1990年から新しくできたイベントなので、最初から市の主導で開催できる。アジア映画祭はアジア太平洋博覧会を盛り上げる目的で民間主導だったため、市がいきなり主催として介入することができなかった。

実は1990年、福岡市教育委員会文化部では、今後アジア映画祭をどうするかの検討会が行われている。だから西日本新聞社は1991年から市にバトンを渡すつもりで1年だけ事務局となった。西日本新聞社からの事業移管の依頼により、福岡市はアジア映画祭を主催するかどうか検討を始めたのである。福岡市が前面にでるなら福岡市の魅力を全国にアピールできるものにしなければならない。そのためには有識者によるこれまでのアジア映画祭の評価と今後の方向性を示す必要がある。

1990年7月に「福岡アジア映画祭を語る会」が福岡市により開催される。福岡市在住の映画評論家・山村謙一氏や地元の配給会社九州ヘラルドエンタープライズ社長の緒方用光氏、他に梁木靖弘氏等も含まれており、この「語る会」が後にアジアフォーカス・福岡映画祭の企画委員会へと繋がっていく。「福岡アジア映画祭を語る会」に前田秀一郎氏は含まれていない。なぜならアジア映画祭の運営をこれ以上彼にまかせられないという意見集約がなされたからだ。この時のことを山村謙一氏が自らの自伝『映画に魅せられて 映画の自分史』に書いている。少し長くなるが引用する。

福岡ではアジアを舞台にした『敦煌』や『女衒』という映画を製作していた東宝や東映の邦画映画会社が、そうした映画の宣伝の一助にと電通、西本新聞広告部とタイ

^{(16) 「}福岡アジア映画祭の歩み」、第6回福岡アジア映画祭事務局/編(1992年)『第6回福岡アジア映画祭公式カタログ』第6回福岡アジア映画祭事務局、59ページ。

アップして「アジア映画祭」という名称で催しをやっていたが、その仕事の実務を頼まれたフリーの映画ジャーナリストだった前田秀一郎さんがあたかも自分が主宰しているように喧伝したものだから、業界では今度出来る福岡市のアジア映画祭のメンバーに前田氏を入れてもらっては困るという雰囲気になっていた。

私はちょうどその頃、福岡市の社会教育委員をやっていたので、私を通じてその旨を市側に伝えて欲しいということになった。私は人も少ないことだし、前田さんを除外するのではなく、運営委員に加えてインド、フィリピン等の映画を担当してもらったらどうか、と映画会社の同意を得た上で市側の窓口である川崎文化部長に提案した。川崎さんはそれはいい案だと賛成してくれた。しかし、川崎さんがその旨を総合ディレクターの佐藤忠男氏に相談したところ、前田さんは何か別件で佐藤さんの機嫌を損ねていたようで、佐藤さんは前田さんが入ってくるなら自分はディレクターを引き受けられないと断られ、結局この妥協案は立ち消えとなってしまった。

この結果、開催予定の平成三年になって今度は前田さんがこれまで映画各社がやっていた「アジア映画祭」を自分が引き受けて七月にやることとなったと記者会見して発表してしまったのである。そんなわけでとうとう二つの「アジア映画祭」が開かれることになってしまった。

前田氏はこの種の映画祭は官主導でなく、民間でやるべきだとの主張だったので、この結果は致し方ないことだったが、前田氏がその年の暮れになって市側に仕事をわけて欲しいと申し入れたことから再びこじれだした。前田さんのこうした態度に興行組合や邦画各社、それに私も驚いてしまった。

もともと前田さんは業界の慣習や取り決めを無視して事を運ぶ欠点があった。一例を挙げれば、ホールでのビデオ上映はやらないというのがビデオ業界と映画興行者との取り決めなのだが、彼はそれを無視して上映するし、正規の製品でない海賊版でも使うため批判が絶えなかった。このため業界の人々は彼に非協力という態度でまとまってしまった。⁽¹⁷⁾

山村謙一氏は東宝東和九州支社の宣伝担当として1959年に福岡に来た。そして1973年退社後、映画評論家として新聞やテレビでの映画解説などを行った。また市の社会教育委員や公民館館長なども務めており、興行界と市、双方に太いパイプを持っていた。だから文化部長に直接話ができたのだ。前田氏は「記者会見はしていない。対立していたのは興行界の一部」と語り、少し食い違うが対立があったことは認めている。

7月に開催された「福岡アジア映画祭を語る会」での意見を受け、「福岡アジア映画祭を 考える会」が結成され8月と9月の2度会議がもたれる。会議の委員長は佐藤忠男氏。委 員に国際交流基金アセアン文化センターの野呂事務局長や東京国際映画祭組織委員会事務

⁽¹⁷⁾ 山村謙一 (2007年)『映画に魅せられて 映画の自分史』弦書房、324ページ。

局長の村山氏、映画監督の小栗康平氏、ピア株式会社の日比野幸子氏等が含まれ、福岡市からは福岡市興行協会会長の岡部氏や九州大学教授の徳永氏、九州芸術工科大学教授の都築氏等が参加している。この会議は10月「福岡アジア映画祭の今後のあり方について」という提言書を提出する。その提言書の内容は次のようなものだった。

福岡アジア映画祭の内容について

- (1) 優れたアジア映画の紹介
- (2) 映画を通じた福岡とアジアの文化交流
- (3) アジア映画の才能の発掘
- (4) アジア子ども映画部門の実施

福岡アジア映画祭に合わせて整備すべき事項

- (1) アジア映画に関する情報の収集と提供
- (2) 福岡アジア映画祭を通じ通訳者、翻訳者等を育成

実施方法

- (1) アジアマンス事業とすること
- (2) 台湾を含むすべてのアジア地域を対象とすること
- (3) 映画祭の個性を造るため総合コーディネーターをおくこと
- (4) 映画関係者だけでなく財界や行政をふくめた実行委員会の設置(18)

これまでのアジア映画祭のように、福岡市で未公開のアジア映画ではなく、日本未公開のアジア映画に日本語字幕をつけての上映を目指しており、子ども映画部門を設ける事などが提言されている。さらに整備すべき事項では建設予定の新図書館に映像ライブラリーを検討すること、映画祭を担う人材を地元で育成することが記されている。

この提言で福岡市が中心となり実行委員会を立ち上げるべきとの理由付けがなされた形だ。さらにこの「福岡アジア映画祭を考える会」の大きな目的は佐藤忠男氏をディレクターにすることだ。8月の会議の時点で佐藤氏はディレクターのなることを承認していない。佐藤氏は「私はこの映画祭で第一回からディレクターになることを福岡市当局から要請された。片手間ではやれない大仕事になるので再三お断わりしたが、市長はじめ上層部の方々からの名指しの要望で断わりきれなかった。」(19)と書いており、簡単に引き受けてはくれなかったのだ。先の山村謙一氏の文章にある前田氏をスタッフに加える妥協案は、まだ佐藤氏がディレクターを引き受ける前、7月から8月の可能性が高い。佐藤氏が前田秀一郎氏との間でトラブルがあったとは思えない。それほど深い関係はなかったからだ。おそらく、ディレクター就任を打診しておきながら、あれこれ注文があるのであれば引き受けない、ということだと思う。福岡市が主催する映画祭の顔となり、アジア各国にも通用するディ

 $^{^{(18)}}$ 福岡アジア映画祭を考える会 / 編(1990)『福岡アジア映画祭の今後のあり方について提言書』福岡アジア映画祭を考える会、 $3ページ\sim6$ ページ。

 $^{^{(19)}}$ 佐藤忠男「アジアフォーカス福岡映画祭の10年」、植草信和 / 編(2000年)『新世紀アジア映画 アジアフォーカス・福岡映画祭から21世紀へ』キネマ旬報社、169ページ。

レクターという人選では佐藤氏は適任である。福岡市が佐藤氏のディレクター就任に固執 したのも理解できる。

9月に佐藤氏はディレクター就任を承諾するが条件が付いた。ただのディレクターではなくジェネラルディレクターであること、そして妻の佐藤久子氏をコーディネーターとすることである。⁽²⁰⁾ 多忙な佐藤氏にとって妻の久子氏はマネージャーのような存在であり、海外に映画を探しに行くときにも夫婦同伴のほうが何かと便利である。海外の映画祭主催の正式なパーティーにも出席しやすい。佐藤氏が映画を選び、久子氏が出品交渉を行うという役割分担がされていく。だからアジアフォーカス事務局との連絡は佐藤久子氏が担うことが多かった。佐藤氏のディレクター就任受諾の後、提言書は10月、市に提出されたのである。

「福岡アジア映画祭を考える会」にはもう一人重要な人物が含まれている。ピア株式会社の日比野幸子氏である。本格的な映画祭を開催するとして、予算はどれくらい必要か。その積算と根拠は。どんな準備が必要か。福岡市には何のノウハウもない。日比野幸子氏は東京で「ぴあフィルムフェスティバル」を担当しており、アジアフォーカスの予算作りに協力を求められたのである。日比野氏は福岡市の次年度予算要求に合わせて長期に福岡市に滞在し、文化部の担当職員とともに資料作りを行った。当時の担当職員は振り返り「自分にとって日比野氏はアジアフォーカス・福岡映画祭を誕生させた最大の功労者」(21) という。積みあげられた負担金の予算は約1億円。財政査定で7千万円となるが、細かな予算案とその積算根拠の資料作り、それを市当局に認めさせる苦労は想像に難くない。地方都市のイベント予算としては破格である。

「福岡アジア映画祭を考える会」は提言書のなかに、建設予定の新図書館に映画のライブラリーを作る検討を促している。整備する事項の「アジア映画に関する情報の収集と提供」がこれに当たる。いずれは地元の人材でアジアフォーカスを開催し、作品はライブラリーに収蔵できないかということだ。これは山村謙一氏を中心とした有志が、アジアフォーカスが始まる以前から福岡県等に要望していた、映画ライブラリー設立を検討事項にいれたと思われる。ただ山村氏は映画ライブラリーをアジア映画に限っていたわけではなかったのだが。現状の福岡の人材では本格的な映画祭は作れない。東京の人材に協力を仰ぎ映画祭を立ち上げる。だから「福岡アジア映画祭を考える会」には地元より東京の委員の方が多い。そして提言書が出てすぐ、前田秀一郎氏に来年度予定のアジアフォーカスでは仕事がないこと、簡単に言えば戦力外通告がなされる。地元興行界の意見に配慮したのだ。

1991年3月13日の西日本新聞に、福岡市が新しいアジア映画祭を立ち上げるという記事

⁽²⁰⁰⁾ 佐藤久子氏によれば正式なコーディネーター就任は第1回のアジアフォーカスの後。「映画祭コーディネーター 佐藤久子が語る映画祭の『これまで』と『これから』。」、アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会 / 編(2000年)『Focus on Asia Fukuoka International Film Festival 1991-2000』アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会、4ページ。

⁽²¹⁾ 2022年 5 月31日、筆者による当時の担当職員へのインタビューから。

がある。

福岡市を、フランス・カンヌに負けぬ映画の都にと、同市の官民が協力、約1億円をかけ、今年九月福岡市で「アジアフォーカス福岡映画祭」を開催することが十二日までに決まった。アジア十カ国から、新作、および監督、俳優を招待、若い映画人の登竜門にしたい、としている。同映画祭は。六十二年から民間中心に始まった「福岡アジア映画祭」(毎年開催)を同市の補助金大幅アップを契機に名称を変更、グレードアップした。(22)

そしてアジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会が立ち上がる。ディレクターは佐藤忠男氏。映画祭実行委員会の名誉会長に桑原市長。会長は(財)西日本銀行国際財団理事長の市川慶三氏。副会長に福岡市興行協会会長の岡部氏と福岡市助役の友池氏。委員には九州電力代表取締役社長の渡辺氏や西日本鉄道代表取締役社長の橋本氏、東宝の九州支社長も名前を連ね、福岡市の映画業界だけでなく経済界の総力を結集した感がある。メインスポンサーは西日本銀行⁽²³⁾である。実行委員会は映画の入場料収入やスポンサーの協賛金も収入にできる。実行委員会の事業予算は1億円を超えることになる。

桑原市長は毎年開催される実行委員会には必ず出席している。アジアフォーカスの事務局は予算を作成した教育委員会ではなく、市民局の文化振興課に設置される。事務局は映画祭会場を福岡市興行組合に打診し、オープニングは大洋劇場、その後のプログラムはソラリアシネマ2と東映パラスとなる。

予算が付き実行委員会ができたとはいえ、事務局に配置された職員はみな初めての業務である。いつ、何をどうすればよいのか誰も分からない。映画の選定を佐藤氏が行い、輸入・通関・字幕作成までは東京での作業、カタログ作りはぴあから独立しオペラナイトを立ち上げた日比野氏が担当。カタログ編集も佐藤忠男と記してある。福岡市の事務局にとっては最初の年は勉強である。映画館に協力を仰いだとはいえ、ゲストの招聘、広報や運営等の実務は事務局がしなければならない。前田秀一郎氏が、1989年までのアジア映画祭で興行界や福岡市の信頼を得ていたならば、ここに活躍の場があっただろう。アジアフォーカス事務局員として東映パラス現場担当になった梁木靖弘氏が、西日本新聞「さらばアジアフォーカス第15回」で下記のように書いている。

会期中、中洲の東映パラス劇場の常駐だったため、ほかの会場(ソラリアシネマ 2)の状況は知らない。半地下のパラスは223席、ソラリアシネマ 2 は136席とどちらも小さいので、お客さんが怒涛のごとく押し寄せた。押し寄せるのはいいが、満席になっ

⁽²²⁾「アジア映画祭グレードアップ、カンヌめざし官民協力 福岡市」『西日本新聞』、1991年 3 月13日、朝刊、1 ページ。

 $^{^{(23)}}$ 現在の西日本シティ銀行。2004年10月1日、西日本銀行は福岡シティ銀行と合併して西日本シティ銀行となる。

ても押し寄せるのだ。いまでは立ち見は厳禁だが、当時は立ち見どころか、すし詰め 状態。ストップをかけたら、「なんで入れんかあ!」とけんか腰だ。「はるばる遠くか ら来たのに、どうしてくれる」と凄まれた。⁽²⁴⁾

満席の際の対応のマニュアルと、適切な人員配置がされていなかったのであろう。とにかく初年度の現場運営は混乱だった。どこにどのような人を何人配置し何をするか。アジアフォーカス事務局は観客を相手にする映画祭運営の大事なノウハウを得ることになる。

アジアフォーカスには下部組織として企画委員会があった。山村謙一氏が委員長で、九州へラルドエンタープライズの緒方社長とシティ情報ふくおかの映画担当である高橋哲也氏が副委員長となり、東宝、東映や松竹の九州支社の代表者と共に梁木靖弘氏や福岡中国映画会代表の横地剛氏等が委員となった。先の「福岡アジア映画祭を語る会」のメンバーをもとにして、地元興行界との関係をつなぎ、さらには人材育成を目的とした委員会だった。筆者も1993年から企画委員となった。企画委員の中から梁木靖弘氏、高橋哲也氏、福岡市美術館学芸員の松浦仁氏、又は事務局員が佐藤氏と共に作品選定のため海外の映画祭に出向いたのだ。筆者も佐藤氏とともにインドやイランに赴いた。

佐藤忠男氏はアジアフォーカス・福岡映画祭'91のカタログの冒頭に「こんな映画祭です」 と題して次のように書いている。

いま各地に、○○映画祭と名のる催しがたくさんある。しかしそのほとんどは、東京などではすでに公開されているけれども、まだその地方では上映されていない作品を集めて上映するというものである。しかし、こんどの〈アジアフォーカス・福岡映画祭'91〉はそれらとは性質が違っている。上映される作品の大部分が日本未公開なのである。その点ではこの映画祭は、東京国際映画祭や山形国際ドキュメンタリー映画祭などとともに、数少ない本格映画祭である。日本人には多少わずらわしいかもしれないが、原則として全作品に日本語と英語の字幕を入れ、日本人と外国人が一緒に見て話し合えるようにした。これは画期的なことであると、いささか自負している。また〈みんなあつまれ!子どもの映画〉という部門を設けて、子どものうちからアジアの子どもたちに親しみを感じてもらえるように試みる。(略)

私はこの映画祭に粒よりの作品を集めた。そのためには、すでに国内では上映されているけれども福岡ではまだ上映されていないというような作品を集めただけではもの足りない。アジアには知られざる多くの傑作がたくさんある。それらを集めるために、私は多くの国々に旅をした。各国にいる多くの友人たちが快く助けてくれた。こんど選ばれたアジアの作品の関係者たちが多数、ゲストとして福岡に招待される。上映の会場で、たんにあいさつをしていただくだけでなく、市民の皆さんと親しく話し

⁽²⁴⁾「さらば、アジアフォーカス 映画祭の回顧15 てんやわんやの初回」『西日本新聞』、2021年10月27日、朝刊、9ページ。

合っていただくつもりだ。そしてアジアの映画人の方々に、自国以外のアジアの映画をみてほしいと思う。アジアの人々には、アジアの仲間たちの映画を知る機会が多くはないからだ。福岡を、アジアの人々同士の交歓の場にしてもらえたら素晴らしいと思う。⁽²⁵⁾

佐藤氏は日本を代表する映画評論家として海外でも知られている。英語やフランス語に翻訳された著書もある。日本は黒澤明や小津安二郎等世界的な巨匠の国で、日本映画を学ぼうと思えば、佐藤氏の著書を読む可能性は高い。また佐藤氏はアジアの映画に早くから興味を示しており、国際交流基金のプロジェクトでアジア各地を旅した経験を持つ。「各国にいる多くの友人たちが快く助けてくれた」とは、佐藤氏だからとも言える。福岡市が佐藤氏をディレクターに据えたメリットはすぐに作品選定に表れる。

1991年の第1回のアジアフォーカスに選ばれたのは、イランのモフセン・マフマルバフ監督の『サイクリスト』(1989年)や香港のアン・ホイ監督の『客途秋根』(1990年)など作品レベルは高く、選定された作品はイランから韓国までアジア全体に及び、1991年3月に亡くなったインドのアラヴィンダン監督を特集するなど、映画祭としてはかなりハイレベルで、そのラインアップは壮観だ。英語字幕を付けて外国人にも理解できるようすることは佐藤氏のアイデアだが、本格的な映画祭であることの証でもある。子ども部門を設けたことは「福岡アジア映画祭を考える会」の提言を実現したのだ。アジアフォーカス・福岡映画祭'91の概要は下記の通りである。数字等は映画祭30周年を記念して映画祭事務局が作成した「アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991 – 2020」(以後、「30周年記念誌」と表記。)から引用する。

アジアフォーカス・福岡映画祭'91

会期: 9月6日(金)~9月13日(金)(8日間)

会場:大洋劇場、東映パラス、ソラリアシネマ2

上映作品:10か国・地域から23作品(アラヴィンダン回顧上映7作品、アジアの秀作映

画13作品、子どもの映画3作品)

観客数:10.724人(26)

観客数は1万人を超え、成功といえるだろう。一方自ら映画祭を立ち上げた前田秀一郎 氏のアジア映画祭の結果は下記である。

第5回福岡アジア映画祭

会期:1991年7月29日~8月6日(9日間)

⁽²⁵⁾ 佐藤忠男「こんな映画祭です」、佐藤忠男 / 編(1991年)『アジアフォーカス・福岡映画祭'91 [公式カタログ]』 アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会、6ページ。

^{(26) 「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編 (2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991 - 2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、16ページ。

会場:明治生命ホール

上映本数:12か国・地域から29本

観客数:2,121人(27)

前田氏はなぜ自らの主催でアジア映画祭をたちあげたのか。1991年7月27日の西日本新聞にこうある。

「アジアに開かれた国際都市」を目指している福岡市で夏から秋口にかけて「アジア」をテーマにした二つの映画祭が開かれる。昨年まで続いてきた「アジア映画祭」が分裂した形だが、いずれにしても一般の映画ファンにとっては、鑑賞の機会が増え、喜ばしいことと言えそうだ。(略)「アジアフォーカス」は、実は昭和六十二年から昨年まで続いた「アジア映画祭」が発展的に解消、これを土台に新設されたもの。このため、本来なら"第五回"はなくなっているはずだが、これを不満とするオフィス・ヌーヴェルヴァーグ代表の前田秀一郎さんらが「観客本位の映画祭を」と引き継いだ。前田さんは「従来のアジア映画祭では、通訳、カタログ翻訳など、二十人ばかりのボランティアが働いてきたのに、今年から市が中心に出てきて、ボランティアが締め出されてしまった。これでは今まで、何のために苦労したのか分からないので、続けることにした。」と言っている。(28)

自主上映組織が自ら映画祭を立ち上げることは素晴らしいが、記事の通りならば名称は違うものにするべきだ。「映画祭を引き継いだ」とあるが、西日本新聞社や興行界、福岡市から依頼されたわけではない。前田氏は「'90年の年末に通訳や翻訳をしてくれたボランティアの人たちと相談し、やろうということになった。佐藤氏とは違う作品選定でやりたい映画は沢山あった。」と語る。福岡市や西日本新聞社は「第5回福岡アジア映画祭」の名称はやめるべきと申し出をするが、前田氏はもう考えを変える気はない。「西日本新聞からはたくさんクレームが来ました。」と前田氏は当時を振り返る。福岡市は前田氏に補助金を交付する理由はなくなる。西日本新聞社も興行界も福岡市側につき、以後前田氏はボランティアスタッフと孤軍奮闘を続けていくことになる。映画祭開催の総予算は約500万円。財源は観覧料と、広告料そしてカンパである。

1991年のアジア映画祭公式カタログには「「福岡アジア映画祭」は皆さんが作る映画祭です」とあり、「「福岡アジア映画祭基金」は、今年予想される赤字と来年のために、随時、皆さんからのカンパを受け付けています。」と記されている。(29) そしてすでにカンパした人

^{(27) 「}福岡アジア映画祭の歩み」、第6回福岡アジア映画祭事務局/編(1992年)『第6回福岡アジア映画祭公式カタログ』第6回福岡アジア映画祭事務局、60ページ。

^{(28)「「}アジア映画祭」今年は2本立て」『西日本新聞』、1991年7月27日、朝刊、9ページ。

^{(29) 「「}福岡アジア映画祭」は皆さんが作る映画祭です」、第5回福岡アジア映画祭事務局/編(1991年)『第5回福岡アジア映画祭公式カタログ』第5回福岡アジア映画祭事務局、1ページ。

たちの名前が掲載されている。カタログは1990年と同じく A4サイズ。アジア映画もこれまでと同様の本数がある。お金を集められるという自信があったのだろう。またアジアフォーカスに対抗するようにその後日本未公開作品の上映も増えていく。第4回までのアジア映画祭とは主催者も映画祭の性格も変わっており、オフィス・ヌーヴェルヴァーグが運営していることが継続したところである。しかし現実は思ったようにはいかず、赤字の解消に苦労することになる。前田氏は「最初の2年間は大変だった。赤字は親に借金しました。まだ返していない。」と語る。

それより問題は東京や海外の映画人の混乱である。福岡に二つのアジアという名称を持つ映画祭があることを知らない映画人たちにとっては、福岡市に来てみたら予想と違っていたという混乱が生じる。私も海外の映画祭に参加した時、「福岡にはアジア映画祭が二つあるんだってね。どう違うんだい。」とよく尋ねられた。2000年頃になっても聞かれていた記憶がある。私も、「「アジアフォーカス」は、実は昭和六十二年から昨年まで続いた「アジア映画祭」が発展的に解消、これを土台に新設されたもの。」という西日本新聞の記事と同じ考えなので、アジア映画祭をアジアフォーカスの前身と位置付けるのだ。

さて話をアジアフォーカスに戻そう。アジアフォーカスはアジア映画に日本語字幕だけでなく英語字幕を付けたこと、子ども映画も部門を設けたこと以外にも特徴はある。外部からはわからないが、映画祭事務局を市民局文化振興課内に設け、専任の職員を配置したこともその一つ。これだけ大きな規模の映画祭を市が直接運営するのである。山形ドキュメンタリー映画祭がこれに近いが、山形の場合は、実行部隊は東京の会社になり、映画祭本番では東京の会社が運営する事務局と、山形市が運営する事務局の2つができていた。

アジアの範囲を中近東まで広めたのも特徴だ。福岡市のアジア美術館の場合は、作品収集を行うアジアの範囲を西の端はパキスタンまでと定めている。中近東や中央アジアは入らない。これは外務省のアジア課がパキスタンまでを担当し、そこから西を中近東課が担当する分け方に合わせている。アジアフォーカスは、アジアの西の端をトルコとして、中近東や中央アジアも範囲とした。特にイラン映画は1991年に上映された『サイクリスト』(1989年 モフセン・マフマルバフ監督)や1993年上映の『友だちのうちはどこ?』(1987年 アッバス・キアロスタミ監督)など、イラン映画史に残る傑作を上映しており、その後もイラン映画はアジアフォーカスの日玉となった。

ディレクター制をとったことも特徴にあげられる。東京国際映画祭は、作品数が多いこともあるが、誰が作品選定をしているのか分からないとよく批判された。⁽³⁰⁾ アジアフォーカスは佐藤忠男氏が選定した映画のみ上映した。選定の責任を明確にしたのだ。ただこれは佐藤氏がディレクターだからできたともいえるだろう。

最後にもう一つ。ベトナムやモンゴル、スリランカなどの映画から日本語字幕を作る際、 原語から翻訳したということがある。こういった言語は日本中探しても翻訳できる人は多

⁽³⁰⁾ 筆者は東京国際映画祭が始まった1985年当時東京の映画配給会社に勤務しており、映画評論家やマスコミ関係の人からよく聞かされた。

くない。映画の字幕は翻訳の仕方が特殊で、言葉ができれば字幕翻訳ができるわけではない。英語の台本がある場合でも本来の言語と比べて、より正しい表現を模索している。劇場でロードショーされる映画の字幕作成の手法であり、映画祭で上映される映画としては大変贅沢な手法である。もっとも最初から英語の翻訳がなかったベトナムやモンゴルの映画は他に方法がなかったかもしれない。字幕制作を担当したスタンス・カンパニーの努力の賜物である。

第1回のアジアフォーカス・福岡映画祭の結果について、西日本新聞に佐藤氏自身が書いた文章が掲載されている。

私が関係しているので手前みそになるが、昨年の九月に行われた第一回アジアフォーカス・福岡国際映画祭は、規模は小さくても質的には、世界的水準で見て相当なものだった。(略)

この映画祭の特集上映でインドの G・アラビンダン監督の諸作品を初めて知ったブラジルの評論家ルシアン・ナジブは、こんな偉大な映画人がアジアにいることを知らなかったと言ってサンパウロの最大の新聞に大きな記事を書いたし、ひきつづき今は亡きアラビンダンの国際的名声は高まって、年末のハワイ映画祭をはじめ、世界各国で彼の旧作が上映され評価される機運が生じている。福岡がアジアの映画を世界に知らせる役割を果たしたのである。この映画祭がアジアの人々からいかに注目されたかということは、ベトナム政府が文部次官を団長とする代表団を福岡に派遣してきたことでも分かる。こんなことはちょっとほかの外国の映画祭でもないことである。(略)おなじような意味で、この映画祭に韓国映画と朝鮮民主主義人民共和国の映画が同時に出品され、両方から監督などの映画人たちが招待されてきたことも画期的なことだった。(略)

アジアとの交流を積極的にすすめてきた福岡の市当局と市民の行動の実績があってのことだが、その盛りあがりはまれにみるもので、手伝った私も大いにやりがいがあった。ひきつづきは発展させたいものである。(31)

佐藤氏は「福岡国際映画祭」と記しているが、文章によって国際があったりなかったりで、おそらく佐藤氏はあまりこだわる意識がなかったのだろうと思われる。国際交流は福岡市の市民とアジアの映画人だけではない、アジアの国同士の交流にも寄与できるのだ。ベトナムはドイモイ政策で経済自由化が始まっていたとはいえ、ベトナム映画が日本で上映される機会はほとんどなかった。まだ未知なる映画国の一つだった。佐藤氏は早速第2回のアジアフォーカスの特集上映をベトナムにすることで調査に行く。

第1回のアジアフォーカスは多くの果実を残した。その一つに会期中開催されたシンポ

^{(31)「}九州文化論 外からの目」『西日本新聞』、1992年1月5日、朝刊、19ページ。

ジウムでインドのサイ・パランジペー監督が、今後の福岡市との交流で望むことという質問に、「アジア映画のライブラリーは作れないか」と発言したことがある。パランジペー監督は桑原市長への表敬訪問でも同様の発言をしており、1990年に出た提言書を大きくバックアップする形となった。以後、福岡市教育委員会では新図書館内にフィルムアーカイヴを建設する検討が本格化していく。

また、日本初公開の知られざるアジア映画の秀作が上映されることは自然に映画業界にも伝わり、アジアフォーカスで上映された作品が、その後映画館でロードショーされたり、NHKで放映されたりすることになる。日本国内のインディペンデント系の配給会社にとっては東京から福岡に来るだけで、20本近い、配給できるかもしれないアジアの新作を見ることができるということは魅力である。またゲストとしてやってきた監督やプロデューサーとも直接話ができる。アジアフォーカスは自然とフィルムマーケットの機能も併せ持つようになっていく。

Ⅳ アジアフォーカス・福岡映画祭1992年~1993年

1992年のアジアフォーカスの概要は下記の通りとなる。

アジアフォーカス・福岡映画祭'92

会期: 9月11日(金)~9月21日(月)(11日間)

会場:ソラリアシネマ1、宝塚シネマ2、スカラエスパシオ

上映作品:18か国・地域から27作品 (協賛企画除く)(ベトナム映画特集、9作品

アジアの秀作映画、11作品、児童映画2作品、東南アジア映画5作品)

観客数:11,885人 (協賛企画除く)(32)

この年から、座席数293席のソラリアシネマ1がメイン会場となり、それが2008年まで続く。そして様々な会場がサブ会場となる。ゲストが宿泊するのは、ソラリアシネマがあるソラリプラザと隣接するソラリアホテル。ホテルには宴会場もあり、ゲストはホテルの部屋からオープニングのパーティーがある宴会場やソラリアシネマにもビルの中を移動するだけで行くことができる。アジアフォーカス事務局はホテルの1室で、ゲストは助けを必要とするときすぐに事務局に行くことができる。事務局にとっても仕事がしやすく大変便利である。空港の出迎えからホテルへ、ホテルから上映会場へと移動もたやすい。ホテルの1室がゲストラウンジとなり、時間が空いたゲストが他のゲストとおしゃべりする事もよくあった。佐藤ディレクターも同じホテルに滞在しており、ゲストが福岡を発つときには可能な限り見送りをしていた。ホスピタリティの良さはよくゲストに指摘されたが、イベント全体がコンパクトで心地よい。市民の歓迎だけでなく、こういった細かいところに

^{(32) 「30}年を振り返って 1991年〜2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳 / 編(2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991 - 2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、18ページ。

も良さはあったのである。ソラリアシネマ以外の他の上映会場はすべて徒歩でいける。コンパクトな街のコンパクトな映画祭という個性がアジアフォーカスに1つ加わる。

この年、企画委員会の発案で、映画の冒頭につける映画祭のオープニングタイトルが作成される。福岡市らしいものをということで、福岡市出身の石井聰亙監督が起用され、玄界灘と山笠を用いたダイナミックの映像が作られた。第1回のアジアフォーカスを経験して、多くの改良がなされていく。この年のカタログはシティ情報ふくおかを発行するプランニング秀巧社が制作する。編集は佐藤氏だが、編集スタッフに企画委員の高橋哲也氏が入る。地元でできる仕事は地元が担うようになる。

この年の最大の特徴はベトナム映画の特集である。ベトナムは社会主義国なので、映画はモスクワ映画祭等では上映されていたが、日本や欧米ではほとんど知られていなかった。ベトナムでは映画に英語の字幕をつける技術がなく、ヨーロッパの映画祭への出品など夢だったのだ。1992年の2月に佐藤夫妻と梁木靖弘氏が映画選定のためハノイを訪れる。ベトナム政府の全面協力により日本初のベトナム映画の特集が実現する。ただし市民的にはまだ「ベトナム映画って何?」という時代である。観客動員的に大きな貢献はないが、英語字幕が付いたベトナム映画はアジアフォーカス終了後その真価を発揮する。アジアフォーカス実行委員会発行の『アジアフォーカス・福岡映画祭'92報告書』にこうある。

「アジアフォーカス・福岡映画祭'92」でのベトナム映画特集は、世界の映画関係者の関心を集め、映画祭終了後各国でこれらの作品群が巡回上映されることとなった。まず、93年1月にデリーで開催されたインド国際映画祭で上映され、以降3月の香港アートセンター、4月の台湾国家電影資料館での上映となった。この際にベトナムからゲストが招待され映画人同士の交流が始まったケースもある。現在もニューヨークでの上映、10月の在ベトナム日本大使館主催の「日本文化月間」での上映などが計画されている。⁽³³⁾

1992年9月27日ジャパンタイムズに掲載された映画評論家ドナルド・リチー氏の評は「これらの新しいベトナム映画が初めて公開されたことは映画界の重要な出来事であり、始まったばかりの福岡映画祭が高い水準を維持していく強力な証明である。大森邦明事務局長のもと、このアジア映画を紹介する毎年の試みは、今や日本でもっとも重要な国際映画祭になったのである。」(34) と絶賛である。英語字幕を付けたことで、福岡市は世界に対する情報発信を実現する。九州の1地方都市が世界に対して映画の貸し出しを行い、ベトナム政府などから感謝されたのである。基本計画でうたった「活力あるアジアの拠点都市」が映画

^{(33)「}ベトナム映画上映その後」、アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会 / 編(1993年)『アジアフォーカス・福岡映画祭 92報告書』アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会、12ページ。

^{(34)「}ベトナムに焦点をあてた福岡映画祭」、アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会 / 編 (1993年)『アジアフォーカス・福岡映画祭'92報告書』アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会、15ページ。

の分野で実現した事になる。福岡市がアジアフォーカスを誕生させたことは正しかったという達成感さえ感じる。

そして巡回上映を終えた映画は、今度は文化財となり総合図書館に保管され、30年後の 現在も総合図書館で上映されている。総合図書館の開館は1996年だが、映画の収集は1993 年から始まる。それまでの映画業界では考えられなかった、映画祭とフィルムアーカイヴ の日本初のコラボレーションが始まるのである。

佐藤氏はベトナム映画の成功でまだ見ぬアジアの国の映画を発掘したいという思いに駆られたことだろう。佐藤氏は著書の『知られざる映画を求めて』に、「私の見果てぬ夢は世界の映画の全体像を把握したいということである。」⁽³⁵⁾ と記している。アジアの国であれば、アジアフォーカスの仕事として行くことが可能になった。次に佐藤氏が目指した国はモンゴルだった。

1993年のアジアフォーカスの概要は下記の通りとなる。

アジアフォーカス・福岡映画祭'93

会期: 9月9日(木)~9月19日(日)(11日間)

会場:ソラリアシネマ1、ニュー大洋1、スカラエスパシオ、都久志会館

上映作品:14か国・地域から27作品 (協賛企画除く)(モンゴル映画特集6作品、アジア の秀作映画8作品、児童映画2作品、第38回アジア太平洋映画祭11作品)

観客数:アジアフォーカス・福岡映画祭1993 11.235人

第38回アジア太平洋映画祭 4.855人 合計16.090人(36)

1993年のアジアフォーカス・カタログ冒頭で佐藤氏はこう書く。

今回の特集はモンゴル映画6本です。おそらくモンゴル映画がこうしてまとめて上映されるのは世界で初めてのことで、福岡がまたアジアのすぐれた文化を世界に紹介する機会になると思います。⁽³⁷⁾

その結果は30周年記念誌に下記のようにある。

前年のベトナム映画特集に続き、この年のモンゴル映画特集も世界的に注目を集めた。 上映された6本の作品は翌年2月ベルリン映画祭フォーラム部門で全作品が紹介され、 ハワイやインドの各映画祭でも一部が紹介された。モンゴル映画は外国語の字幕を付 ける技術もなく、資金もままならないため、独自に国外の映画祭に出品できず、「マン

⁽³⁵⁾佐藤忠男(1999年)『知られざる映画を求めて』現代書館、5ページ。

^{(36)「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編 (2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991 - 2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、20ページ。

⁽³⁷⁾ 佐藤忠男「作品選定について」、佐藤忠男 / 編 (1993年)『アジアフォーカス・福岡映画祭93 [公式カタログ]』、アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会、6ページ。

ドハイ | 等の一部の映画を除いて、国内に埋もれたままになっていた。(38)

モンゴルはベトナムと同様に、日本人にとっても世界の映画人にとっても未知の国だったのだ。映画は世界3大映画祭の一つ、ベルリン映画祭のプログラムになり、アジアフォーカスが作った英語字幕付映画が上映された。このベトナムとモンゴルの映画の世界巡回はアジアフォーカスの国際貢献としては白眉だった。さらに福岡のモンゴル映画特集を受けて、国際交流基金は1998年に大規模な「モンゴル映画祭」を開催する。もちろんアジアフォーカスで上映された6本も、交流基金の「モンゴル映画祭」で上映される。アジアフォーカスは東京にも先んずるようになる。

さらにこの年の大きな特徴は第38回アジア太平洋映画祭が同時開催されたことである。 アジア太平洋映画祭は日本、香港、シンガポール、インドネシアなど東アジアの映画会社 が設立したアジア映画製作者連盟が主催する映画祭。日本で開催する場合は東京で開催さ れることが通例だったが、この年は日本映画製作者連盟の開催依頼に応じた形でアジア フォーカスと同時開催となったのだ。アジアフォーカス実行委員会がアジア太平洋映画祭 の開催を援助する形だった。アジア太平洋映画祭は映画人たちのお祭りなので、あまり一 般に公開されない。ただしこの年はアジアフォーカスとの同時開催なので、一般観客もす べての映画を見ることができた。また上映作品を可能な限り総合図書館に寄贈することが とりきめられた。

このアジア太平洋映画祭は2004年にもう一度福岡で開催される。この映画祭はアジア各都市を巡回しながら開催されるのだが、日本で開催されるのは1993年の次が2004年だった。つまり日本では福岡で続けて開催されたことになる。2004年は福岡県と福岡市がアジア太平洋映画祭の共催者になっており、佐藤忠男氏がスーパーバイザーとして作品選定に加わるなどより深い関係性ができている。

▼ アジアフォーカス・福岡映画祭1994年~1997年

佐藤氏のアジア各地をめぐる旅は、1994年「スリランカ映画特集」、1995年「イラン映画 特集」、1996年「フィリピン映画特集」、1997年「台湾映画特集」として実現していく。各 年の概要は以下の通り。

アジアフォーカス・福岡映画祭'94

会期: 9月9日(金)~9月18日(日)(10日間)

会場:ソラリアシネマ1、ニュー大洋2、明治生命ホール

上映作品:13か国・地域から36作品(スリランカ映画特集7作品、アジアの秀作映画11

^{(38) 「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編 (2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991 - 2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、20ページ。

作品、児童映画2作品)

観客数:アジアフォーカス・福岡映画祭1994 14,084人

協賛企画など 2,940人 合計 17,024人⁽³⁹⁾

アジアフォーカス・福岡映画祭'95

会期: 9月14日(木)~9月24日(日)(11日間)

会場:ソラリアシネマ1、明治生命ホール、東映グランド

上映作品:11か国・地域から26作品(イラン映画特集7作品、アジアの秀作映画11作品)

観客数:アジアフォーカス・福岡映画祭1995 15.596人

協賛企画など 3,682人 合計 19.278人(40)

アジアフォーカス・福岡映画祭'96

会期: 9月13日(金)~9月23日(月・祝)(11日間)

会場:ソラリアシネマ1、明治生命ホール、東映グランド

都久志会館、福岡市総合図書館映像ホール

上映作品:12か国・地域から40作品(フィリピン映画特集7作品、アジアの秀作映画13

作品)

観客数:アジアフォーカス・福岡映画祭1996 13,693人

協賛企画など 1,967人 合計 15.660人(41)

アジアフォーカス・福岡映画祭'97

会期: 9月12日(金)~9月21日(日)(10日間)

会場:ソラリアシネマ1、エルガーラホール、都久志会館、福岡ピカデリー

上映作品:12か国・地域から27作品(台湾映画特集7作品、アジアの秀作映画13作品)

観客数:アジアフォーカス・福岡映画祭1997 11.866人

協替企画など 2.251人 合計 14.117人(42)

スリランカにはアジア映画界の巨匠レスター・ジェームス・ピーリス監督がいる。しか しピーリス監督以外はほとんど知られていない。未知の映画国といっても良い。しかし1994 年にはスリランカよりさらに知られざる国、ミャンマーの『川の流れのように』(1989年

^{(39) 「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編 (2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991 - 2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、22ページ。

^{(40)「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・高見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編(2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991-2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、24ページ。

^{(41)「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・高見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳 / 編 (2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991 - 2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、26ページ。

^{(42)「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳 / 編(2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991 - 2020』 アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、28ページ。

チー・ソウ・トン監督)とラオスの『レッド・ロータス』(1988年 ソムオック・スッティポン監督)が上映された。ミャンマーは当時軍事政権で、入国さえ簡単ではない。佐藤久子氏はアジアフォーカス10周年を記念して作られた『Focus on Asia Fukuoka International Film Festival 1991-2000』(以後、「10周年記念誌」と表記)の中で次のように述べている。

ミャンマーは本当に大変でした。まずビザを取るのに大使や公使に何回も電話して、書式にのっとった英語の手紙を書いて。準備万端整えて、一週間の予定で調査に行きましたが、三日たっても関係者のだれにも会うことができません。映画人はどうも反体制の人が多くて、政府を通してきた外国人には会うことができないのです。どうにもならなくなって、とうとう日本大使にお願いして映画を見られるように手配していただきました。結局、三日間で十七本見ることができましたが、これがほとんどつまらないものばかり。(43)

佐藤忠男氏にとってもミャンマーは未知の国だった。良い映画がないと市に迷惑をかけるからと、自費での渡航だった。日本大使館などを動かせるのは佐藤氏でなければできないことだ。17本見て、ようやく眼鏡にかなった作品が『川の流れのように』 1本だった。この映画は1989年の作品で1994年の段階でそれほど古い映画ではない。しかしミャンマーの映画保存状況の悪さから、ネガフィルム自体が劣化していた。アジアフォーカス事務局はネガを日本に運び、東京のイマジカが現像を担当し、できうる限り最良の上映用プリントを作成して上映する。こんな映画祭は世界でもない。佐藤氏にしてみればミャンマーに行って映画を見たということは自慢できる事だったようで、海外の映画祭で知り合いに会うとミャンマー映画を17本見たことを良く話されていた。みんな驚いていたので、やはり世界中でも未知の国だったのだ。

ラオスの『レッド・ロータス』はタイのフィルムアーカイブからの情報提供である。アジアフォーカスは、自分で情報発信ができないアジアの国の映画をサポートしてくれる。ベトナムやモンゴルの映画での実績が、アジアフォーカスに対するアジアからの協力関係として構築されていく。希少な映画の発掘という意味では、1994年がピークだったのではないかと思う。福岡市在住の作家で映画評論家の友成純一氏がキネマ旬報の1994年11月上旬号に次のように書いている。

アジア映画は今世界的なブームとなっている。私は年に一度はヨーロッパの映画祭に 出かけるのだが、そこで必ず聞かれるのは、「日本では今どんなアジア映画が評判に なっているのか」である。いちおう日本はアジアの中心ということになっており、ア

^{(43) 「}映画祭コーディネーター佐藤久子が語る映画祭の『これまで』と『これから』。」、アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会 / 編(2000年)『Focus on Asia Fukuoka International Film Festival 1991-2000』アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会、5ページ。

ジアの話題作はまず日本で上映されると考えられているからだ。いちいちどの映画が どうだと説明するのも面倒なのでこのアジアフォーカス映画祭のパンフを持っていく ことにした。この映画祭はアジア映画が中心だというので、少なからず関心を集めて いるようである。⁽⁴⁴⁾

また梁木靖弘氏が朝日新聞に映画祭を振り返る文章を書いているがそこにはこうある。

昨年あたりから顕著になってきたのは、若い観客がどっと増えたことである。若い女性が目立つ。この時期に夏休みをとって、東京から全作品を見に来たという若い女性もいた。⁽⁴⁵⁾

日本でスリランカやモンゴル等の映画を定期的に紹介した映画祭はアジアフォーカス以外にはない。世界からの注目、アジアフォーカスを目当てにした観光客の増加と、アジアフォーカスは順調に発展していく。1994年からゲストのサイン会が映画上映後に開催される。ファンにはたまらないサービスだろう。日本では無名の監督でも福岡の観客は暖かく応援してくれる。東京国際映画祭では感じることのできない親近感と暖かさを、福岡に来たゲストは感じる。だからまた来たいと思う。またアジアフォーカスの上映作品に選ばれるということは、世界的に著名な映画評論家・佐藤忠男に評価されたということになる。特に特集上映以後、スリランカの監督たちは毎年誰が選ばれるか気になってしかたがないということになる。アジアフォーカスの上映作品に選ばれることで国内の評価が上がるからだ。インドや台湾でも同様になっていく。

イランやフィリピンの映画については佐藤氏にはある程度の知識があり、行けば良いプログラムが作れる自信があったと思う。より深く知るための「探求」といえる。イランのダリユシ・メールジュイ監督やアミル・ナデリ監督、フィリピンのマリルー・ディアス=アバヤ監督、台湾の60年代の巨匠リー・シン監督や台湾語映画の紹介など、アジア映画を知る上で欠かせないすばらしいラインアップである。この頃東京でも民間の実行委員会により「'96イラン映画祭」(1996年)や「韓国映画祭1946-1996知られざる映画大陸」(1996年)「台湾映画祭」(1997年)などが開催されるようになり、そういった動きに先んじていたアジアフォーカスは、アジア映画の聖地のような地位を得ていく。日本中のアジア映画ファンが集う映画祭となったのだ。観客数も協賛企画を含めた数で1995年に19,278人となり、過去最高となる。

変更点として1995年から児童映画の部門がなくなる。いかに子どもが主人公のわかりや

⁽⁴⁴⁾ 友成純一「第四回アジアフォーカス・福岡映画祭'94報告 福岡で見たアジア映画の傑作・秀作群」、植草信和/編(1994)『キネマ旬報94年11月上旬』、キネマ旬報社、79ページ。

^{(45) 「}渇きいやす豊かな水脈 アジアフォーカス・福岡映画祭を振り返る」『朝日新聞』、1994年9月24日、夕刊、9ページ。

すい映画とはいえ、日本語字幕付きで小学生が理解するのは難しい。優秀な作品を毎年探 すのは骨が折れる作業だった。

佐藤氏は1996年から日本映画学校の校長となる。学校を設立したのは映画監督の今村昌平で、学校の理事長も務めていた。校長就任は今村監督に直接依頼されたものだが、佐藤氏は「自分が校長を引き受けることで今村監督が新作を作れるのなら」(46)と校長に就任する。そのかいあって今村監督は97年に『うなぎ』を発表し、カンヌ映画祭でパルムドールを受賞する。アジアフォーカスの評価はそのまま佐藤氏の評価の高まりとなり、以前にもまして多忙となっていく。

福岡市は1995年に大学生のオリンピックである「第18回ユニバーシアード大会1995福岡」を8月から9月かけて開催する。福岡市はこういった国際的なイベントを開催できる力をつけていく。さらに1996年、福岡市とアジアフォーカスにとっての大きなトピックは6月の総合図書館の開館である。キャナルシティ内に福岡市初のシネマコンプレックス、AMCが誕生したのもこの年の3月である。福岡の街が大きく変わってきている。

総合図書館の開館はアジアフォーカスにとって大きな影響があった。来日した監督たちは総合図書館で自分の映画がどのように大切に保管されているのか実際に見ることができる。またアジアフォーカスで上映された作品を総合図書館が買い取るという仕組みは、佐藤氏にとって大きなモチベーションとなる。永久保存する映画を選定するということだ。

佐藤氏は当時筆者に「これで東京国際映画祭に勝てる」と言ってくれた。アジアの監督たちにとって、アジアフォーカスと東京国際映画祭の両方から招待を受けた場合どうするか。9月のアジアフォーカスに出せば10月の東京国際映画祭には出せない。ビジネスチャンスを望むなら東京に出品する方が良い。だがアジア映画の場合もともと多くのビジネスチャンスは望めない。アジアフォーカスなら総合図書館が確実に買ってくれる。さらに日本国内で公開するために佐藤氏の支援も得られるかもしれない。また一度福岡に来れば、映画人たちは福岡の居心地の良さを理解する。佐藤氏が強力に参加を呼び掛けるアジアフォーカスと、ビジネスライクに招待する東京国際映画祭との比較で、アジアの映画人たちがアジアフォーカスを選ぶ可能性が高まるのだ。

1996年には釜山国際映画祭が始まる。国が支援する韓国では最大規模の映画祭で、日本でいえば東京国際映画祭に相当する。韓国からはすでに何人ものゲストがアジアフォーカスに訪れており、当時釜山国際映画祭の最初の目標は「福岡を追い越す」事だと聞いた。映画祭の規模が違うのでそれは容易いのだが、真意は「福岡のように高い評価を得る」ということだったと思う。釜山国際映画祭は東京国際映画祭さえもすぐに凌駕し、アジアでの1番を目指して国を挙げて驀進する様はうらやましくもあった。

⁽⁴⁶⁾ 当時、映画祭会期中に筆者が佐藤氏から直接聞いた言葉。以後佐藤氏の発言は表記がないかぎり、筆者が本人から聞いた事。

VI アジアフォーカス・福岡映画祭1998年~2000年

1998年から2000年までのアジアフォーカスの概要は下記となる。

アジアフォーカス・福岡映画祭'98

会期: 9月11日(金)~9月20日(日)(10日間)

会場:ソラリアシネマ1、エルガーラホール、都久志会館、あいれふ10階講堂

上映作品:15か国・地域から30作品(上映作品 21作品)

観客数:アジアフォーカス・福岡映画祭1998 15,519人

協賛企画など 852人 合計 16.371人(47)

アジアフォーカス・福岡映画祭'99

会期:9月10日(金)~9月19日(日)(10日間)

会場:ソラリアシネマ1、エルガーラホール、あいれふ10階講堂

上映作品:12か国・地域から27作品(上映作品 20作品)

観客数: アジアフォーカス・福岡映画祭1999 14,916人

協賛企画など 1,274人 合計 16,190人(48)

アジアフォーカス・福岡映画祭2000

会期: 9月8日(金)~9月17日(日)(10日間)

会場:ソラリアシネマ1、エルガーラホール、都久志会館、

福岡アジア美術館あじびホール

上映作品:15か国・地域から50作品(アジアパノラマ17本、インド映画コレクション5

本、アジアフォーカス傑作選1991-1999 9本)

観客数:アジアフォーカス・福岡映画祭2000 16.690人

協賛企画など 2,101人 合計 18,791人(49)

上映作品の()はアジア映画の新作や特集として上映された作品数が分かるよう記しているが、1998年と1999年はそれ以前のように「アジアの秀作映画」といった表記がされていない。ソラリアシネマがメイン会場であることは変わらないが、1997年からエルガーラホールが新たに上映会場となる。エルガーラホールは天神に新しくできたエルガーラビル8階にある多目的ホール。エルガーラビルの特徴的な形と、大丸百貨店とエルガーラビルの間に新しくできたパサージュ広場は天神の新しいランドマークとなった。福岡アジア

^{(47)「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編(2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991-2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、30ページ。

^{(48)「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編 (2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991 - 2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、32ページ。

^{(49)「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編 (2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991 - 2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、34ページ。

美術館あじびホールは、1999年に福岡市が作った福岡アジア美術館にある多目的ホール。福岡アジア美術館はアジア美術を専門に集める美術館として国際的に知られている。アジアに開かれた国際都市福岡の新たな達成といってもいい。1990年にイムズが映画祭会場となってから、新しくできた施設を会場とし活性化を図る、というアジアフォーカスを用いた街づくりという福岡市の方針はそのまま継続している。

作品選定としては、各国の特集がなくなり、より幅広いアジア各国から選定されるようになる。ただし1998年は特集とは銘打っていないが、5本のインド映画が上映されており、インド映画特集の年といっても良かったのかもしれない。個人的には1998年の白眉は『ザ・コンタクト』(1997年 チャン・ユンヒョン監督)と『8月のクリスマス』(1998年 ホ・ジノ監督)の2本の韓国映画だったと思う。韓国映画の『シュリ』(1999年 カン・ジェギュ監督)が韓国で公開されるのが1999年2月。爆発的に吹き上がる韓国映画の隆盛を『ザ・コンタクト』と『8月のクリスマス』は予見するようだった。

インド映画特集は2000年に「インド映画コレクション2000」として再度開催される。2000年はインド独立50周年であり、インド映画も独立をテーマとしたものを含めて多くの作品が製作された。この時私は佐藤夫妻とニューデリーのインド映画祭に参加したが、秀作が多かった。選ばれた5作品以外にも2~3本は選定レベルにあったと記憶している。上映作品に選ばれた『心のままに』(1999年 サンジャイ・リーラー・バンサーリー監督)は日本で『ミモラ』という題で劇場公開されるが、とてもよくできた娯楽作だった。これなら選んでも良いという佐藤氏の判断だが、逆に私から言えば、このくらい良い出来栄えでないと娯楽作は選ばれないのかと思った。1998年に上映されたインド映画『神の戯れ』(1997年 ジャヤラージ監督)を決めた時にも私は佐藤夫妻とインド映画祭に参加したが、上映が終わると佐藤氏はすぐにゲストの主演俳優に駆け寄り「素晴らしかった」と感想を語っていた。私も素晴らしい映画と思ったが、「アジアフォーカスに招待する」と決めた時の判断と動きの速さは勉強になった。

1998年のアジアフォーカス・カタログの冒頭に佐藤氏はこう書く。

今年もアジア諸国から優秀な作品が集まりました。アジアはいま、政治的、文化的、経済的に激しく動きつつありますが、それを真向うから反映した作品や、伝統を見直し、民族の心のよりどころを確認しようとする作品など、多彩です。(50)

人は、国だけでなく民族、宗教、文化など様々なコミュニティーのなかで暮らしている。 みんな自分たちの物語があり、それを描いて見てもらいたい。私は日本にいては知りえな い世界が無数にあることをインドで知った。その中から福岡の市民にどれを紹介するか。 ディレクターが全体を見てバランスをとるわけだが、難しい仕事であることも痛感した。

⁽⁵⁰⁾ 佐藤忠男「活力あふるるアジア映画」、佐藤忠男 / 編(1998年)『アジアフォーカス・福岡映画祭'98 [公式カタログ]』、アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会、5ページ。

まだ行っていないアジアの国であれば、トルコや中央アジアもありえたかもしれない。特 定の国の特集から、広くアジアの国々の映画を紹介する方に、方針がシフトしていく。

1999年にアジアフォーカス事務局に大きな変化がある。アジアフォーカス専属の学芸員で岩槻歩氏が採用されたのだ。アジアフォーカス事務局は、それまで福岡市の事務職員と嘱託で構成されていたので、専門職の採用は初めてであり、日本国内でも映画祭担当専門職員は初である。福岡市の映像専門の学芸員は私に続いて二人目となる。兵庫県出身で千葉大学大学院を出ており、単身福岡に住むことになったのだが、映画の仕事がしたいという情熱を持ち、英語も堪能、優秀な女性だった。事務職員は数年で交代することが宿命なので、福岡市としてはアジアフォーカスのノウハウを継承することを期待したわけである。ただ残念なことに体調を崩し、アジアフォーカス事務局は2001年までしか在職できなかった。以後アジアフォーカス事務局に専門職員は採用されていない。

また最大の変化は1998年秋の市長選で、市長が桑原敬一氏から山崎広太郎氏に代わったこと。福岡市の市政の変化は当然、アジアフォーカスにも関係していく。桑原市長と佐藤ディレクターの時代は、ある意味アジアフォーカスの蜜月だったと思う。佐藤ディレクターは毎年アジアフォーカス終了時に必ず桑原市長と会談して、その年の成果を報告していた。福岡市のPRと街作りにアジアフォーカスが貢献していることを市長も喜んでいた。佐藤氏のディレクター就任は福岡市からの依頼だが、それに胡坐をかかずに佐藤氏は努力していたと思う。福岡に来たゲストが寂しくないようにと、自費で食事をおごったり、お土産を手渡したりと自分が責任を持つ映画祭であるという自負が感じられた。桑原市長の理解とサポートのおかげで佐藤ディレクターは安心して仕事ができた。

市長が変われば、佐藤氏は市長との関係を再度構築しなければならない。就任したばかりの山崎市長にすれば、選挙戦の時大きな話題となった人工島開発などが優先で、アジアフォーカスは喫緊の政治課題ではない。佐藤氏は山崎市長が桑原市長ほどには文化に興味を示さないことを危惧していた。福岡市からのアジアフォーカス実行委員会への負担金は当時9千5百万円。横ばい状態で、大きな変化はない。ただし企業からの協賛金は減少していく。

Ⅲ アジアフォーカス・福岡映画祭2001年~2005年

2001年から2005年までのアジアフォーカス概要は下記の通り アジアフォーカス・福岡映画祭2001

会期: 9月14日(金)~9月24日(月・休)(11日間)

会場:ソラリアシネマ1、エルガーラホール、都久志会館、

福岡アジア美術館あじびホール、中洲大洋1

上映作品:15か国・地域から30作品(アジアパノラマ14本、イラン映画コレクション4本、中国語圏映画特集7本、マリルー・ディアス=アバヤ監督特集7本)

観客数:アジアフォーカス・福岡映画祭2001 17,896人

協賛企画など 2,599人 合計 20,495人(51)

アジアフォーカス・福岡映画祭2002

会期: 9月13日(金)~9月23日(月・祝)(11日間)

会場:ソラリアシネマ1、エルガーラホール、西鉄ホール、都久志会館、

NTT 夢天神ホール、福岡アジア美術館あじびホール

上映作品:15か国・地域から60作品(映画でみるイスラム世界7本、アジア・パノラマ

14本、スリランカ映画コレクション6本)

観客数:アジアフォーカス・福岡映画祭2002 17.690人

協賛企画など 4,911人 合計 22.601人(52)

アジアフォーカス・福岡映画祭2003

会期: 9月12日(金)~9月23日(火·祝)(12日間)

会場:ソラリアシネマ1、エルガーラホール、西鉄ホール、

NTT 夢天神ホール、福岡アジア美術館あじびホール

上映作品:14か国・地域から60作品(アジアパノラマ15本、アジアの女性監督たち6本、

ベトナム映画コレクション4本、韓国映画コレクション5本)

観客数:アジアフォーカス・福岡映画祭2003 18,235人

協賛企画など 4,485人 合計 22.720人(53)

アジアフォーカス・福岡映画祭2004

会期:9月10日(金)~9月20日(月・祝)(11日間)

会場:ソラリアシネマ1、エルガーラホール、西鉄ホール、ふくふくホール、

NTT 夢天神ホール、福岡アジア美術館あじびホール

AMC キャナルシティ13 (第49回アジア太平洋映画祭)

上映作品:19か国・地域から54作品(アジアパノラマ27本)

観客数:アジアフォーカス・福岡映画祭2004 17.076人

協賛企画など 3,315人

第49回アジア太平洋映画祭 2.629人 合計 23.020人 (54)

^{(51) 「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編(2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991-2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、36ページ。

^{(52) 「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編(2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991-2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、38ページ。

^{(53)「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編(2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991-2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、40ページ。

^{(54)「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編(2021)アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、42ページ。

アジアフォーカス・福岡映画祭2005

会期: 9月16(金)~9月25日(日)(10日間)

会場:ソラリアシネマ1、エルガーラホール、西鉄ホール、ふくふくホール、

NTT 夢天神ホール、中央市民センター

上映作品:15か国・地域から36作品(中東映画特集7本、アジア・パノラマ18本)

観客数:アジアフォーカス・福岡映画祭2005 16,446人

協賛企画など 2,230人 合計 18,676人(55)

上映プログラムは「アジア・パノラマ」と銘打たれたアジア各国の秀作の上映と、その時々のミニ特集が組まれる。2001年は「イラン映画コレクション」と題してイラン映画4本の上映がある。2002年は「映画で見るイスラム世界」7本と「スリランカ映画コレクション」6本。「映画で見るイスラム世界」は2001年におきたニューヨーク同時多発テロに触発された企画である。2003年は「アジアの女性監督たち」と題して6本の女性監督作品を特集。さらに「ベトナム映画コレクション」を4本。ベトナム映画の特集はベトナム映画50周年を記念したもの。2004年はアジアパノラマ部門だけでミニ特集はなく、全部で27本を上映している。2005年は「中東映画特集」で7本を上映という具合である。上映作品で異色なのは2003年に初めてオーストラリア映画『雲の下を』(2001年 イワン・セン監督)が加わる。アジア太平洋フェスティバルにオーストラリアが参加したためで、佐藤ディレクター時代、オーストラリア映画がプログラムされたのはこの年と2004年だけである。アジアフォーカスがアジアマンスの中核であったことが分かる。

会場としては、新しくできた西鉄ホールや新装岩田屋にできた NTT 夢天神ホール、福岡市市民福祉プラザにあるふくふくホールも協賛企画の会場として参加している。

この時期の特徴として上映作品の増加がある。協賛企画を除いた上映本数は1999年までは概ね20本程度で推移していた。それが増加傾向となる。1999年は20本、2000年は22本、2001年は25本、2002年は27本という具合である。以後佐藤ディレクターが辞任する2006年まで25本~27本が上映されている。

アジアフォーカス実行委員会の予算が増えたわけではないので、上映本数を増やすのは何らかの工夫がいる。まず日本国内の映画会社が所有している作品を借りる方法がある。2001年の『鬼子来了(鬼が来た!)』(中国 2000年 チアン・ウェン監督)、2002年の『ラスト・プレゼント』(韓国 2001年 オ・ギファン監督)、『きらめきの季節』(台湾 2001年 チャン・ツォーチ監督)、2003年の『ションヤンの酒家(みせ)』(中国 2002年 フォ・ジェンチイ監督)、2004年の『僕が9歳になったら』(韓国 2004年 ユン・イノ監督)などがそれにあたる。日本国内の他の映画祭で上映された映画を招待する方法もある。2001年の『パロミタ』(インド 1999年 アパルナ・セン監督)が該当する。

^{(55) 「30}年を振り返って 1991年~2020年上映作品一覧」、梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳/編(2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991 - 2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会、44ページ。

さらに字幕作成にかかる予算を減らす、といった方法がある。字幕は英語と日本語両方を日本国内で作成していたが、英語字幕は海外でも作れる。英語字幕付きの35ミリプリントを輸入すれば、経費は抑えられる。贅沢な運営が次第にできなくなっていく。そもそも映画祭の場合、海外から順当にプリントが送られてくるとは限らない。作品決定が遅れることもあれば、様々な事情で35ミリプリントがなかなか日本に到着しない場合もある。日本語への翻訳は事前にできるが、字幕作成はプリントが日本に到着しないとできない。35ミリプリントに字幕を焼きこむ作業は東京のラボでしかできない。だから35ミリプリントの到着が遅れた場合、翻訳者と字幕作成担当スタッフは突貫作業に追われることになる。実際、アジアフォーカスの初日に東京から福岡に日本語字幕付きプリントが到着する、といったこともあった。最初から英語が付いていれば、翻訳は日本語だけでいい。作業時間と経費の短縮ができる。ただし英語訳が正しいかどうかは若干怪しい国はある。

また協賛企画の増加もこの時期の特徴としてあげられる。アジアフォーカス本体とは別に、様々な市民団体等がアジアフォーカスと時期を同じくして、いろいろな上映会や講演会などを開催している。アジアフォーカスの企画委員会が行う「中国映画特集」、アジアの映画人が福岡アジア文化賞を受賞した時にも企画委員会により受賞記念上映が開催された。1999年の「侯孝賢レトロスペクティブ1980-87」、2001年の「マリルー・ディアス=アバヤ監督特集」などがそうである。企画委員会はアジアフォーカス内部組織だが、1999年に市民団体「アジアの心実行委員」が協賛企画に参加する。1999年の「今語る満州映画協会(満映)」も市民団体の協賛企画である。年によりばらつきはあるが全体として少しずつ協賛企画が増えていく。

2003年福岡市にフィルムコミッションが設立される。フィルムコミッションは映画製作をサポートする組織で、例えば道路での撮影許可申請など、民間では難しい実務を公的にサポートすることで、撮影をスムーズに行えるようにする組織。韓国の釜山ではフィルムコミッションが大活躍し、釜山を舞台にした映画が多数製作されていた。市民からすれば映画撮影の現場を見ることができ、エキストラ参加も可能である。有名俳優に会えるチャンスもある。撮影場所がその後観光地になるケースもある。近隣では北九州市がフィルムコミッション活動で大きな成果を残しており、遅まきながら福岡市もそこに参加した形である。福岡市のフィルムコミッション事務所は映画祭事務局の隣で、フィルムコミッションが協力した映画がアジアフォーカスのプログラムに入るのは時間の問題となる。映画祭、フィルムコミッション、フィルムアーカイヴという映画に関わる3つの組織が福岡市にそろう。

順風な時代にも思えるが、アジアフォーカス本体の観客数は上映本数を増やしても横ばいである。素晴らしい傑作を含めて良質なアジア映画が選ばれていた。ここで振り返って、佐藤忠男氏の映画選定の基準を考えてみる。アジアフォーカスの記者発表などで記者からも良く聞かれた質問である。1992年の映画祭カタログに佐藤氏はこう書く。

- *まず、市民の方々に喜んでいただける面白い映画。
- *芸術性の高い、心のこもった映画。
- *アジアへの理解を深めるのに役立つ映画。
- *まだ日本にほとんど映画が紹介されたことのない国によい作品があったら、ぜひ。
- *さらに、子どもも大人も一緒に楽しめる児童映画も(56)

上記の説明でも分かりやすいが、2000年9月6日の西日本新聞でのインタビュー記事も 参考になる。

基準は、アジアを理解するのに役に立つのか、アジアに好意的に接するための情報を得られるのかどうか、ということ。(略)普通の人の感受性を大切にしながら、普通の人の生活を描いている映画の方が、かえって日本に入ってこないし、アジアを理解する上では重要だ。だから「恋する惑星」より「鉄道員(ぽっぽや)」のような映画の方がいい。その意味では「家庭の主婦向きの映画」が私の基準といえる。(57)

さらに10周年記念誌の中で佐藤久子氏がもう少し具体的に語っている。

映画を選ぶときに考えることは、どの国に対しても偏見をもたないということです。そして、その国が誇りに思っているものをできるだけ選ぶようにしたいと思っています。(略) 具体的な基準としては、エロと暴力はできるだけ避けること。政治的なプロパガンダを目的にしたものや、お互い敵対し合う目的を持って作られたものも避けるようにしています。(略) それから、独りよがりな表現をとっている作品も避けるようにしています。(略) そしてやっぱり、見て楽しい娯楽性のある映画もなくてはと思います。社会問題を追及している映画ばかりを集めることも控えています。これを機会にアジアの映画人が福岡から世界に出ていくことができるように、そんなことも考えていますし、もちろん福岡市総合図書館の映像ライブラリーに永久保存する価値があるということも考えて選んでいます。(58)

大変盛沢山なのだが、一作一作を選びながら、最後は全体でプログラムに偏りがないように調整していたことが分かる。娯楽作品を選び、社会派もあり、アジア理解を深める作

⁽⁵⁶⁾ 佐藤忠男「今回の映画祭 作品選定にあたって」、佐藤忠男 / 編(1992年)『アジアフォーカス・福岡映画祭'92 [公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会、6ページ。

^{(57)「}アジアフォーカス・福岡映画祭2000 佐藤ディレクターに聞く」『西日本新聞』、2000年9月6日、朝刊、13ページ。

⁽⁵⁸⁾「映画祭コーディネーター佐藤久子が語る映画祭の『これまで』と『これから』。」、アジアフォーカス・福岡映画 祭実行委員会 / 編(2000年)『Focus on Asia Fukuoka International Film Festival 1991-2000』アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会、6ページ。

品もあり、実験的な作品は避ける。安心して見ることができるラインアップが毎回提供されてくるが、その「佐藤カラー」にマンネリを感じる人も出てくる。韓国のイム・グォンテク監督、フィリピンのマリルー・ディアス=アバヤ監督、ベトナムのダン・ニャット・ミン監督など福岡に何度も来ている監督たちは、佐藤氏との個人的なつながりで選ばれているのでは、という作品の質とは何の関係もない憶測さえ語られる。見ているのは映画マニアばかりで、市民はアジア映画に興味がない、などの批判も当然ある。

福岡市にとってはアジアフォーカス・福岡映画祭が「佐藤映画祭」のように言われるのが一番本意ではなかっただろう。ディレクター交代の時期が近づいていたが、もともと佐藤氏は福岡市が三顧の礼をもってして迎えたディレクターである。これまでの実績も素晴らしく交代をお願いするのは簡単ではない。

『映画の祭りは終わらない(下)』に続く

参考文献

- ・前田秀一郎・今村ミヨ・花田泉・間ふさ子・松崎恵子 / 編(1988年)『福岡アジア映画祭'88公式カタログ』福岡アジア映画祭実行委員会
- ・第6回福岡アジア映画祭事務局/編(1992年)『第6回福岡アジア映画祭公式カタログ』福岡アジア映画祭事務局
- ・佐藤忠男 / 編(1991年)『アジアフォーカス・福岡映画祭 91 [公式カタログ]』 アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会
- ・佐藤忠男 / 編(1992年)『アジアフォーカス・福岡映画祭'92 [公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会
- ・佐藤忠男 / 編(1993年)『アジアフォーカス・福岡映画祭'93 [公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会
- ・佐藤忠男 / 編(1998年)『アジアフォーカス・福岡映画祭'98 [公式カタログ]』アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会
- ・アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会 / 編(1993年)『アジアフォーカス・福岡映画祭'92報告書』 アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会
- ・アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会 / 編(2000年)『Focus on Asia Fukuoka International Film Festival 1991-2000』アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会
- ・梁木靖弘・楠本賢司・榊田大成・髙見澤朋子・井上由紀・田島安江・藤田瞳 / 編 (2021)『アジアフォーカス・福岡国際映画祭全作品集1991 2020』アジアフォーカス・福岡国際映画祭実行委員会
- ・植草信和 / 編(2000年)『新世紀アジア映画 アジアフォーカス・福岡映画祭から21世紀へ』 キネマ旬 報社
- ・佐藤忠男(1999年)『知られざる映画を求めて』現代書店
- ・福岡アジア映画祭を考える会 / 編(1990年)『福岡アジア映画祭の今後のあり方について 提言書』福岡アジア映画祭を考える会
- ・山村謙一(2007年)『映画に魅せられて 映画の自分史』弦書房

石井幸孝

『国鉄―「日本最大の企業」の栄光と崩壊』(中公新書)

新書判 400ページ 2022年8月 定価:1,210円(本体1,100円+税10%) [ISBN978-4-12-102714-6] 中央公論新社刊

筆者の石井幸孝氏は1955年に国鉄に入社後、ディーゼル機関車開発、のちには国鉄の経営にも携わり、分割民営化後は九州旅客鉄道株式会社 (JR 九州) の初代社長として条件の良くない同社の経営を軌道に乗せる手腕を発揮された。

本書は、日本国有鉄道(国鉄)の38年間の栄枯盛衰を著者ご本人の実体験を交えて描き出したものであり、いわば内部の視点からの国鉄史となっている。

本書は8つの章と終章から構成されている。まず、第2次世界大戦後の混乱と国鉄誕生までの歩みと手探りの中での出発が描かれる(第1章及び第2章)。次に、約40年の国鉄史の前半の全盛時の国鉄とその経営矛盾について述べられる(第3章)。その次に、著者が設計に従事したディーゼル機関車の普及とSL全廃のいきさつが紹介される(第4章)。国鉄衰退の原因の1つとして鉄道の現場の状況と特殊な労働組合という組織上の問題点が取り上げられる(第5章)。国鉄の財政問題では、通常、赤字ローカル路線問題が取り上げられるが、実際には貨物輸送での失敗も重要であったことが指摘される(第6章)。国鉄後半の20年は相次ぐ再建計画の失敗であり、ついに分割民営化という国鉄改革に至るという経緯が記されている(第7章及び第8章)。最後に、JR九州の誕生時における著者の奮闘が描かれ、日本と日本の鉄道の未来に対する思いが語られている(終章)。

多くの読者にとって、国鉄の歴史はいわば同時代の出来事かもしれない。しかし、本書に登場する出来事には、初めて聞き及ぶ、それも当事者でなければ分からない情報が多いことに驚かされるであろう。また、当時の報道等で知られる有名な事件についても、その詳細な背景がふんだんに盛り込まれている。例えば、蒸気機関車の廃止のあとは、電化によって電気機関車等が引き継いだイメージが強いかもしれないが、実際には電化ができない数多くの路線ではディーゼル機関車などが非常に重要な役割を担っていた。また、国鉄衰退の要因については、旅客輸送の分野で自動車や航空機といったほかの輸送手段との競争に敗れたことはよく知られているが、貨物輸送での営業的な失敗による顧客離れも国鉄の衰退につながったとされる。特に、貨物からの顧客離れの契機がいわゆる「スト権スト」への対応にあったという指摘についても、読者にとっては新鮮であるかもしれない。

ここで、本書の筆者石井氏が国鉄分割民営化後のJR 各社についてどのような主張と提言

をされているのかについて触れておきたい(この点に関しては主に終章に述べられている)。 石井氏によれば、分割民営化は基本的に成功であったとしているが、第1に、「本州3社」 (JR東日本、東海及び西日本)にくらべて経営条件で不利な「三島会社」(JR北海道、四国 及び九州) は苦戦しており、特に JR北海道は財政支援も含めた強力な経営改革が必要であ る。第2に、地球環境問題や近年のトラック輸送問題という視点からみれば、鉄道貨物の 重要性は高まっており、JR貨物を本格的に活用する好機が到来している。第3に、新幹線 の高速ネットワークを活用した本格的な「新幹線物流」を実現すべきである、と主張して いる。特に「新幹線物流」は第1の点である JR北海道経営改革の一部として、また、第2 の点の JR貨物活用と深く関連し、「本州3社」からの新幹線分離と JR貨物の結合による新 しい会社設立の提言につながっていると思われる。このような整理はいささか強引かもし れないが、本書全体を読み返していただければ、各所にその「伏線」があることに気づい ていただけるであろう。

最後に、本書が鉄道開業150周年での出版ということもあり、本書に関する書評はすでに 多数にのぼっている。また、中央公論新社のウェブサイトには著者へのインタビューが掲載されており、著者の人となりや本書への思いなどがよく分かる。こちらも多くの書評同様一読に値すると思われる。

木幡 伸二

森平雅彦・辻野裕紀・波潟剛・元兼正浩編 『日韓の交流と共生―多様性の過去・現在・未来― (九州大学韓国研究センター叢書 5)』

A5判 244ページ 2022年8月 定価:5,280円(本体 4,800円+税10%) [ISBN978-4-7985-0338-7] 九州大学出版会刊

本書は九州大学韓国研究センター叢書の第5巻として発刊されたものであり、「交流と共生」を共通テーマとしながら、韓国や朝鮮半島、コリアン社会などに関する歴史、教育、言論、文学の分野の研究者たちによる論考によって構成されている。ここでは紙幅の都合上、本学会の会員が執筆したものに限定して紹介をおこないたい。

まず、波潟剛会員の「第11章 在日コリアン文学の現在」である。この章では、近年 (2010 年代以降) の在日コリアン文学の特徴について論じられている。とりあげられているのは、活躍が顕著な女性作家たち(深沢潮、崔実、ヤン・ヨンヒ、柳美里)である。筆者によれば、在日コリアン文学を読むことの意義は、「文化の多様性や異文化との共存について考える重要な場を提供し得る」(179-180頁) ことにある。

近年、日本社会では K-POP や韓国ドラマの人気をきっかけに、韓国の文化や社会、言語などへの関心はますます高まっている。また、韓国の大衆文化に触れることが、韓国(人)に対する良い印象や親しみを抱くことにつながっている。その反面、「嫌韓」の風潮も広がり、在日コリアンを対象とするヘイトスピーチに象徴されるように、日本社会におけるマイノリティへの無理解や差別・暴力的言動は一層深刻化しているともいえる(その一例である「ヘイト京都事件」については、具良鈺「第10章 日本のヘイトと在日コリアンとしての生―ヘイトクライム、ヘイトスピーチのない社会をめざして―」を参照)。

このような状況にどう向き合うべきだろうか。筆者は柳美里の「対話」をめぐる言葉や、作家のブレイディみかこが説く「『他者の立場に立って想像』する『能力』」の重要性(189頁)に言及しながら、在日コリアン文学を読むことにより、読者がこのような能力について考え、身につける契機が得られるとする。そして、そのような力が「日韓の交流と共生を進める際に重要になるのではないか」(190頁)と提言している。

次に西谷郁会員の「第12章 ディアスポラと労働・工作の表象―2014年以後のチャン・ リュル映画についての一考察―」をとりあげる。この章では、国際的に高く評価されてい る中国朝鮮族出身の映画監督チャン・リュル(張律 장曼)の2014年から現在までの作品に ついて考察が加えられている。

筆者によれば、かつての同監督の作品では、中国朝鮮族が主たる登場人物であり、マイノリティの苦難や困窮に焦点があてられる傾向があった。だが、2014年以降は、韓国で撮影した作品が手掛けられるようになり、最近は『福岡』(2019年)や『柳川』(2021年)と福岡を舞台としたものもある。そして、これらの作品で描かれる登場人物は「生き甲斐を重視」(195頁)する者として描かれていると指摘する。また、「人の移動の動機を探求する物語形式」(200頁)こそが同監督作品の最大の特徴であるとしつつ、近年の北東アジアにおける人の移動のあり方を念頭におきながら、「ディアスポラ的な意識」(194頁)をキーワードにして分析を加えている。

さらに、登場人物たちが翻訳なしで異なる言語により会話しても意思疎通ができる場面が度々登場することに注目する。なぜなら、そこには「言語翻訳に依存しなくても可能なコミュニケーションのありようとその潜在力の豊かさ」(206頁)を示そうとする意図が込められているからである。

ますます複雑化する北東アジアにおける「交流」や「共生」のあり方とは?いずれの論 考もこのことを考える手がかりを私たちに与えてくれるだろう。

山田 良介

緒方義広・古橋綾ほか(著) 『韓国学ハンマダン』

A5判 194ページ 2022年12月 定価: 2,860円 (本体2,600円+税10%) 「ISBN9784000615693〕岩波書店刊

最近、K - POPを筆頭に韓国文化・社会に関する関心が高い。悪化している日韓関係の行方への関心も高い。しかし、韓国に関するいろんな情報が氾濫する中で、果たして私たちは韓国についてどこまで本当に知っているのだろうか。メディアで見せている韓国の姿はどれだけ現実に近いのだろうか。

『韓国学ハンマダン』は、メディアを通じて流れる韓国に関する安易な分析について疑問を持って企画された本だという。9人の韓国専門家が、それぞれ異なる専攻分野(歴史学、政治学、経済学、文学、社会学、言語学など)を通じて韓国を眺める。専門家が書いたと言えば一般読者からすると、学術的で硬い内容の本だと思われるかも知れない。しかし、この本は、本人たちが韓国で長年生活しながら体得した各々の視点を入れた本であり、とても読みやすい点が特徴である。

本書のもう一つの特徴は、この本の企画趣旨からも分かるように、既存研究とは異なる 立体的な視点の提供である。民主化運動、在日コリアン、慰安婦、歴史教科書、歴史観な どは今まで多く論じられてきたキーワードではあるが、本書では、今までとはやや違った アプローチが展開される。

「第1部つながる記憶といま」では、民主化運動、在日コリアン、慰安婦問題のような、過去の重要な出来事とその記憶が掘り下げられ、それらと現在の韓国社会とのつながりが明らかにされている。たとえば、民主化運動を記憶する方法が問題とされている。「ヒーロー中心」の記憶方法は、民主化運動に関わっていたごく普通の人々の悲しみや悩みの記憶を希薄化してしまう可能性がある。これは、植民地時代を韓国が記憶する方法にも同じく当てはまる問題である。韓国の植民地時代の記憶は選択的な記憶の仕方であるという意見も存在している。日本の植民地支配に関して、特定の問題だけが非常に高い頻度で取り上げられて関心を集めること、言い換えれば、選択的に記憶し、怒りを表出するというその方法が批判されるのである。

「第2部 歴史からいまを考える」では、韓国の歴史教科書、古代史における朝鮮のとらえ方、韓国文学をテーマに「歴史的な事柄をどのようにとらえているのか」が検討されている。たとえば、事実を淡々と記述するのではなく、ストーリーテリングを通じて当時の

状況をいっそうリアルに体験させるように構成されている韓国の歴史教科書は、自分の経験のように感じさせるため、行動・実践にも繋がりやすい。日本の植民地支配をめぐる歴史が今なお韓国人の対日感情とそれに基づく行動・実践を強く規定している所以である。なお、この点に関連して留意すべきは、"韓国人の対日感情が強く掻き立てられるのは、日本の植民地支配そのものだけによるわけではない"という点である。実は、韓国では、日本の植民地支配から解放された後も、「植民地支配時代の権力構造を踏襲して韓国内で暴政を敷いてきた勢力」が権力の中枢を握り、「民衆弾圧」を行ってきたという歴史がある。それも遠い昔の話ではなく、わずか30年前までそうした現実が実際にあったのであり、それは実感を伴った歴史となっている。そうした実感を伴う歴史が、直接経験を必ずしも伴わない日本の植民地支配の歴史と結びつけられて理解されることで、韓国人の対日感情とそれに基づく行動・実践がいっそう駆り立てられているのである。

「第3部韓国社会のいまを生きる」では、日本と韓国で生活している人々のインタビュー調査などを通じて、「韓国の今」がリアルに描き出されている。急激な経済成長に伴う社会的変化の中で、人々の価値観・考え方は多様化している。同じ時代に多様な考え方が存在することで、深刻な社会的葛藤が引き起こされている面もある。世代間対立、格差問題と多様なライフスタイル、性別間の対立などがその代表的な例である。「1987年のある調査によれば、…(中略)…韓国人の母親の5人に4人が、自分の娘を大学に進学させたいと考えていた」という。しかし、娘を大学に行かせ、社会的に活躍することを願うその母親が、大学を卒業したら、結婚して「良妻賢母」になることを娘に強要する。それが世代間対立につながっているのである。このような社会的葛藤が韓国社会のあちこちに現れているという。

知れば知るほど韓国は「独特な国」である。だが、ただ「独特な国だね」と見過ごすのではなく、なぜ韓国が「独特な国」になったのかを知る必要がある。韓国は、過去、現在はもちろん、未来においても日本の最も近い隣国だからだ。

本書は、韓国の実像を認識し、どこに課題があるのかを立体的に理解する上でとても有益な一冊である。 一人でも多くの方に手に取っていただきたい。

鄭ハナ

2022年度学会活動

1. 2022年 東アジア学会 創立30周年記念大会 (第32回大会) 「東アジアの30年 |

日 時:2022年5月28日(土) 10:00~17:40

場 所: 西南学院大学 西南コミュニティセンター 1階 多目的室

午前の部(10:00~11:40)

■徳島賞受賞者による報告会

座長 西田顕生(西南学院大学)

第一報告

木村 貴(福岡女子大学)

「韓国司法が語る『1965年体制』のほころび」

第二報告

荒木雪葉 (福岡大学)

「『論語』における健康」

午後の部 (13:50~17:40)

■共通論題シンポジウム 東アジアの30年

文化部会セッション(13:50~14:50)

安達義弘 (愛心国際ビジネスカレッジ、東アジア学会副会長)

「30周年記念号(文化)の総括|

新谷秀明 (西南学院大学)

「戦争文学とは何か-火野葦平の今日的意義|

王 宇南 (西南学院大学)

「出版市場から見る文革期以降の中国文学」

経済部会セッション(14:50~15:50)

木幡伸二 (福岡大学)

「中国経済の30年」

猿渡 剛(福岡大学)

「アジア地域統合の30年」

藤川昇悟 (西南学院大学)

「日本企業のアジア展開の30年」

政治部会セッション(16:00~17:00)

菅 英輝 (大阪大学)

「冷戦後の日米関係 - 日米安保再定義を中心に」

綛田芳憲(立命館アジア太平洋大学)

「冷戦後の日朝関係と日本の安全保障政策|

山田良介 (九州国際大学)

「日本における戦後補償問題の30年|

総括セッション(17:00~17:40)

座長 安達義弘 (愛心国際ビジネスカレッジ、東アジア学会副会長) コメンテーター 小川雄平 (九州情報大学、東アジア学会会長)

2. 定例研究会

第92回定例研究会

日 時:2022年11月26日(土)13:00~17:20

場 所:西南学院大学 学術研究所棟 第3会議室

第1報告

陳 志 (東亜大学大学院博士後期東亜大学大学院総合学術研究科博士後期課程 デザイン専攻) 「持続可能なデザインに関する研究 — 子どもの教育用イラストカードを中心に — 」 第2報告

八尋義幸

「映画の祭りは終わらない — アジアフォーカス・福岡国際映画祭の始まりから終わりまで — 」 講演

宋 婷(吉林大学 外国語学院)

「2004年以降の日本文学における「認知症」描写|

第93回定例研究会

日 時:2023年1月28日(土)14:00~16:40

場 所:西南学院大学 西南コミュニティーセンター 2階会議室

第1報告

佐々井司 (福井県立大学地域経済研究所教授)

「日本における外国人人口の動向ならびに労働力需給に関する考察」

第2報告

池下讓治(福井県立大学地域経済研究所教授)

「日本の国際競争力と地域経済活性化の視座から見た(高度)外国人材 — 北陸地域における事例を中心に — |

第3報告

深川博史(東海大学文理融合学部教授・九州大学名誉教授)

「韓国農村社会の存続と外国人労働者の受入れ」

第94回定例研究会

日 時:2023年2月18日(土)14:30~17:10

場 所:福岡女子大学 講義棟 C201教室

第1報告

鄭 敬娥 (大分大学教育学部)

「韓国における『親日』をめぐる認識の形成と『清算』の政治過程」

第2報告

綛田芳憲 (立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部)

「日本は抑止力を強化すべきなのか」



印刷全般

(学術書、学会機関誌・ポスター・チラシ、日英翻訳出版、テキスト、名刺等)

翻訳 (日↔英)

(翻訳全般、教育プログラム等)

西南学院オリジナルグッズ 販売

(ボールペン、ポーチ、扇子、西南チロリアン、セナフィー等)

生花販売、保険代理事業 等







キャンパスサポート西南

福岡市早良区百道1丁目14-29 TEL.092-823-3576 FAX.092-823-3590 URL http://www.cs-seinan.co.jp



編集後記

東アジア研究第31号をお届けします。

今号は査読済みの論文1本、研究資料1本、書籍紹介3本を掲載しています。

周亜芸会員の論文は、中国の「留守児童」に関するものです。現代中国の問題に切り込んで詳細に分析した意欲作です。八尋義幸会員の研究資料は、1991年から30回にわたって開催された「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」の歴史を内部の視点によってまとめた貴重な文章です。今号掲載分はその前編にあたり、後編は次号に掲載予定です。また今号には、会員の著書に関する書籍紹介が3本掲載されています。ぜひご一読ください。また、お忙しい中査読をお引き受けくださった先生方、誠にありがとうございました。

今号から木幡会員が新たに編集委員に加わることになりました。今後も紙面の 充実に努めてまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(編集担当:荒木雪葉、木幡伸二、山田良介)

東アジア研究_(東アジア学会機関誌) 第31号

発行日:2023年3月 発 行:東アジア学会 事務局:〒814-8511

> 福岡市早良区西新6丁目2番92号 西南学院大学 学術研究所 藤川研究室内

TEL: (092)823-4227 (代表)

E-mail: eastasianstudies2020@gmail.com

※本書の無断転載は難くお断りいたします。
予め学会事務局あて許諾を求めてください。



East Asian Studies

A Practical Study on the Formation Process of Negative Perceptions of Rural Communities in a 'Left-behind Child' in China:

Utilizing Problem-posing Learning ZHOU Yayun

The festival of movies will not ends: From the Beginning of the Focus on

Book Guides

Year 2022 Activity Report